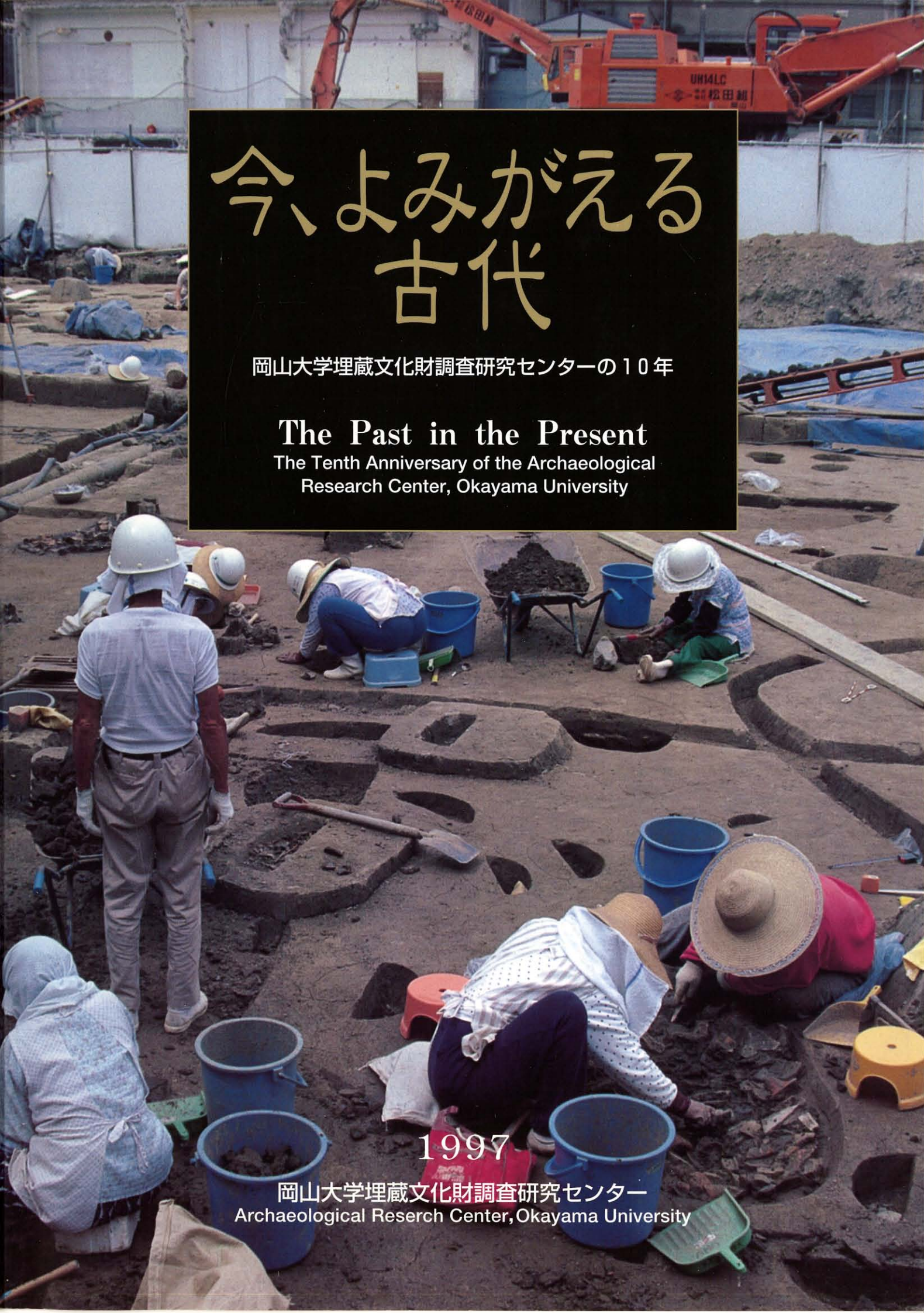


今、よみがえる古代

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの１０年

The Past in the Present

The Tenth Anniversary of the Archaeological Research Center, Okayama University

1997

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
Archaeological Reserch Center, Okayama University

うつわ

縄文時代

弥生時代～古墳時代

古代

中世

装い

耳飾り
(縄文時代)

漆塗り櫛(縄文時代)

指輪
(縄文時代)

竪櫛(古代)

甲(古墳時代)

10周年を迎えて

昭和62年に設置された岡山大学埋蔵文化財調査研究センターは、本年11月26日をもって10周年を迎えます。一つの節目を経過するわけですが、記念の出版物を刊行するということであり、ひとことご挨拶を申しあげます。

本学は11の学部をはじめとして、大学院・附属研究所・附属図書館・全国共同利用施設・学内共同教育研究施設・学内共同利用施設など多数の部局から成っており、キャンパスも岡山市内の津島・鹿田地区を中心に岡山県・鳥取県・香川県下の9カ所にひろがっています。各学部・研究施設等では、日進月歩の研究のなかで最新の成果を追究しており、またこれからの学問研究と社会の発展を担うすぐれた人材の養成につとめているところです。

研究の進展と研究教育機構の拡大にしたがい、施設・設備の新設や更新にたいする要望が各方面からつよくだされております。これまで研究棟・講義棟のほか、図書館や福利厚生施設など、豊かで質の高い学問・教育の環境を維持するために不可欠な施設の建設にも尽力してきたところです。将来における本学のさらなる飛躍をめざすとき、こうした施設の充実はますます大きな課題となってまいります。

ところで近年、遺跡や遺物の新発見に関する話題が連日のようにマスコミ等で取りあげられております。悠久の過去への関心の高さをしめしているようです。本学構内でも19年前にはじめて遺跡が確認されて以来、埋蔵文化財調査室あるいは埋蔵文化財調査研究センター等によって数多くの発掘調査が行われ、多大な成果が得られています。とりわけ津島地区の津島岡大遺跡と鹿田地区の鹿田遺跡は、ともに屈指の重要遺跡であるとききます。4000年来の文化財の上に今日の学術研究と教育の府があることを思うとき、なにか偶然でないものを感じざるをえないでしょう。

ともあれ、本学における研究教育発展のために施設を充実させていく課題と文化財を適切に保護し調査していく課題は、両立させなければなりません。そうした点で本学埋蔵文化財調査研究センターの意義はますます重要になるはずです。炎天下や寒風の吹きぬける野外での調査にはなかなか厳しいものがあるかと思いますが、センター職員諸氏のいっそうの活躍を期待いたします。また、センターの運営にさまざまなかたちでご支援を願っている本学各部局および文化財保護の指導を賜っている文化庁・岡山県教育委員会・岡山市教育委員会に厚くお礼申しあげます。

岡山大学長・岡山大学埋蔵文化財
調査研究センター管理委員長　　小坂　二度見

10年の歴史とこれから

遺跡の保護を目的として大学が発掘調査機関を設置している例は、国立・私立をとわず、全国ですでに相当数にのぼっております。いずれも研究教育施設の建設により構内の遺跡が破壊されるおそれが生じたことが設置のきっかけとなっているようです。本学の場合も1978年にはじめてキャンパス内に遺跡の分布することが判明し、1983年には埋蔵文化財調査室が発足しました。しかしその後も建設工事があいつぎ、工事前の試掘調査でつぎつぎに遺跡のひろがりを確認するにいたり、調査体制をいっそう強化する必要に迫られることとなりました。かくして1987年、学則設置による本センターの発足となったわけです。調査室・センターの両時期をあわせた発掘調査の結果、鹿田キャンパスでは弥生時代と古代・中世を主とする集落の遺構が濃密に分布することが明らかとなり、津島キャンパスには縄文時代集落や弥生時代以降の水田遺構の重なりが判明してきました。

センター機構となってようやく調査研究と出土遺物保管の本拠地となる建物が確保されました。また、年間予算に基づく計画的な事業推進も可能となりました。センターでは、発掘調査のほかに、毎年数十件にもおよぶ小規模工事に対する立ち会い調査への対応、木器保存処理施設の建設と運用、発掘調査報告書や年報・センター報の刊行、出土遺物展示会の開催など、各種の事業を推進してきております。これらの実績が関係学界における研究の発展と地域の歴史の解明にいささかなりとも貢献できたとすれば、それはなにより本学内外の関係機関・関係各位のご支援とご協力のたまものであります。10周年を迎えるにあたり、あらためて深甚の謝意を表したいと思います。

本センターの設置と調査事業の推進は、もとより文化財保護法の精神にのっとったものであります。しかし意義はそれだけにとどまるものではありません。本センターの蓄積している出土文化財はすでに相当な量にのぼっています。今後は、こうした資料や調査成果をさらに教育活動にも積極的に活用する道を開いていくことが必要でしょう。また、文化財は国民共有の財産という面があり、生涯教育の糧として地域市民にひろく研究成果を還元していくことも大切です。本学には自然科学・人文科学両分野を含めて膨大な量の学術標本が保存されていますが、関係の学部・機関との連携をはかり、たとえば大学博物館を創設してそうした活動の発信基地にしていく課題もあるかと思います。そのための努力は、本学が開かれた大学としてさらに発展していく方向にも結びつくものと信じます。各位のいっそうのご支援とご鞭撻を心からお願いする次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究
センター長　　稲田　孝司

今、よみがえる古代

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年

目次

学長あいさつ
センター長あいさつ

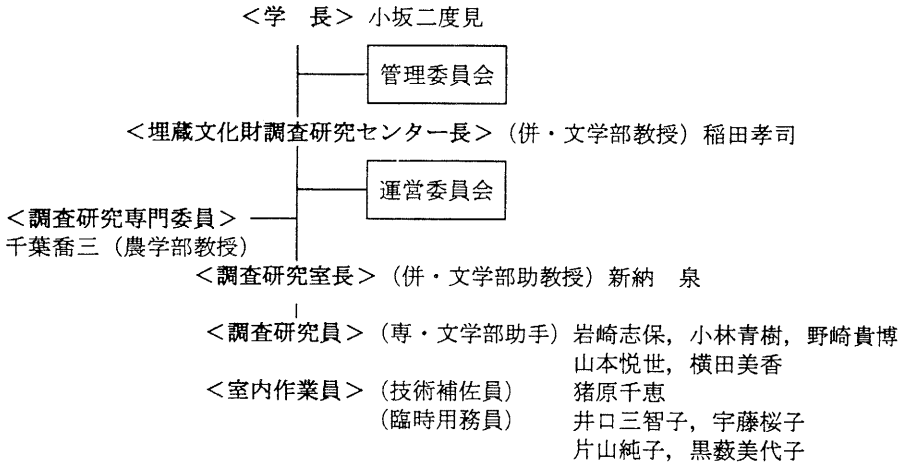
センター10年のあゆみ ---- 1

よみがえる古代　－10年の調査成果から－
岡大キャンパスの遺跡　－縄文から現代へ－ ---- 3
家と村
縄文時代の三朝 ---- 7
田園風景の軌跡－稲作の開始から現代まで－ ---- 8
井戸を掘ってみれば ---- 9
古代の鹿田 ---- 10
食生活
縄文人の生活の知恵－ドングリの里　津島ムラ－ ---- 11
漁民の生活－石錘・土錘・蛸壺・製塩土器－ ---- 12
道具
縄文時代の容器 ---- 13
吉備の甕 ---- 14
運び込まれた石の道具 ---- 15
木の道具にまつわること ---- 16
装いと占い
ファッションの歴史 ---- 17
古代のまじないグッズ ---- 18
戦争
戦士の装備 ---- 19
半田山にお城があった－半田山城－ ---- 20
遺跡・遺物の科学
遺物の科学 ---- 21
出土遺物の保存処理 ---- 22

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター10年に関する資料編
岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について ---- 23
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告 ---- 27
岡山大学構内遺跡調査研究業務に関る資料 ---- 33

あとがき・英文要旨（Summary） ---- 40

１９９７年度埋蔵文化財調査研究センター組織



管理委員

学　長	小坂二度見	文化科学研究科長	岩間　一雄
文学部長	成田　常雄	自然科学研究科長	岩見　基弘
教育学部長	松畑　熙一	資源生物科学研究所長	青山　勲
法学部長	植松　秀雄	附属図書館長	神立　春樹
経済学部長	坂本　忠次	医学部附属病院長	大森　弘之
理学部長	佐藤　公行	歯学部附属病院長	村山　洋二
医学部長	産賀　敏彦	固体地球研究センター長	久城　育夫
歯学部長	松村　智弘	医療技術短期大学部長	遠藤　浩
薬学部長	篠田　純男	学生部長	伊澤　秀而
工学部長	中島　利勝	事務局長	藤井　武
農学部長	内田　仙二	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田　孝司
環境理工学部長	河野伊一郎		
＜幹事＞			
庶務部長	厚谷　彰雄	経理部長	黄楊川英了
施設部長	井内　敏雄		

運営委員

埋蔵文化財調査研究センター長	稲田　孝司	理学部教授	柴田　次夫
文学部教授	狩野　久	医学部教授	村上　宅郎
経済学部教授	建部　和広	農学部教授	千葉　喬三
埋蔵文化財調査研究センター			（調査研究専門委員）
調査研究室長	新納　泉	施設部長	井内　敏雄

センター10年の歩み

センター設立にいたる経緯

岡山大学構内で最初に遺跡が発見されたのは、1978年の医学部附属病院臨床研究棟建設に先立つ岡山市教育委員会の立会調査の時でした。1981年には医学部附属動物実験施設建設の際に遺跡が破壊される事態がおこり、翌年、津島キャンパスでも文学部構内において新たな遺跡（当初、小橋法目黒遺跡と称した）を確認するにいたりました。後者については緊急措置として文学部考古学研究室が発掘調査にあたったのですが、こうした状況が学内に構内遺跡の保護・調査を目的とする機関の設置を強く促し、1983年３月１日、室長１名、助手１名の体制で埋蔵文化財調査室が発足しました。ところが発足後の調査は、鹿田遺跡１次・２次調査に加えて津島岡大遺跡２次調査も並行するという、通常の発掘能力をはるかに上回るものでした。さらに、1986年以降にも再び年間３件以上の発掘調査をこなさざるを得ない状況に陥ります。その間、助手１名の増員はあったものの、調査・研究など諸活動での停滞が危惧される状態が慢性化し始めました。

センターの設立

こうした状況を改善するため、1987年11月26日に岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが学則によって設置され、センター長１名（併任）、室長１名（併任）、助手７名（専任）、技術補佐員２名の陣容と、独自の年間運営予算が確保されることとなりました。センター運営の基本方針は学長の主宰する管理委員会が定め、年間業務の具体的な計画は運営委員会で決定します。センター施設については、本部を津島地区に移した1988年春の段階に管理棟１棟（床面積105㎡）と２階建ての収蔵施設（同162㎡）が建設され、続いて翌年の増設工事により収蔵施設の面積は333㎡に拡大しました。その中には、狭いながらも展示室・写真撮影室の設置がなされ、整理・研究作業のスペースを確保することができました。同施設では、出土遺物の保管、発掘器材の収納、遺物の洗浄から実測までの整理作業を行っています。

岡大構内遺跡は沖積地にあり、井戸・溝などの水に関わる遺構が多いため、特に木製品が多く出土します。木製品を恒久的に空気中で保管するには科学処理が必要です。当初、その処理は専門業者への委託でしたが、費用が高額なため、可能なものは自前で処理することになり、1992年に保存処理棟の建設に踏み切りました。床面積39□ の施設です。

発掘調査の成果

発掘調査の実施は、調査室・センターの両時期を含む15年間（1983－1997年）に、津島岡大遺跡で17回、鹿田遺跡で６回、三朝地区で１回の合計24回にのぼります。

津島岡大遺跡では、当初、全体に遺構密度は希薄であると考えられていました。ところが、遺跡の状態が明らかとなるにしたがい、その成果は予想をはるかに越えるもので、とりわけ縄文時代の遺構や弥生時代以後の水田のデータは目をみはるものとなっています。縄文の世界は、現地表から４～５ｍまでの深さに眠っていること、そして、今とはまったく違う、起伏に富んだ地形や集落の様子がわかってきました。また、たしかに弥生時代以降は水田中心の生産の場としての性格が強いのですが、近年、弥生時代後期初頭や古墳時代の集落、あるいは古代の集落の可能性をうかがうことのでき

るデータも得られてきています。一方、鹿田遺跡は中世遺跡と評されていたのですが、弥生時代～古墳時代初頭や平安時代の集落が良好に残っていました。調査を追うごとに、遺跡の広がりや集落の性格を考えさせる資料が増えています。

発掘成果の研究にあたっては、本学内外の自然科学系研究者との連携による学際研究に早い時期から積極的に取りくんできました。とりわけ出土した植物種子の分析では、縄文農耕の存否問題にもかかわる貴重な成果を上げています。

調査・研究の成果の公開

構内の遺跡で発掘した成果は、関係学界や専門分野の研究者に報告するため、「発掘調査報告」にまとめます。報告書は調査室時代に２冊、センター設置後は10冊をそれぞれ刊行し、学界の高い評価を受けています。このほか、年間の調査研究業務の報告を「構内遺跡調査研究年報」として年１回、またセンター設置以後は一般向けに「センター報」を年２回それぞれ刊行しています。センター報は、専門外の一般の方にもわかりやすく、速報性も備えた内容をめざしており、構内遺跡が身近に感じられると評判です。このほか、近年ではインターネットの活用も一つの方法として試みています。

出土遺物の公開としては、1989年に第１回の特別展示会を津島地区で催しました。同時に行った講演会や古代の食生活復元を行った考古教室も好評をはくし、鹿田キャンパスで第２回目の展示会開催（1990年）を促することになりました。1996年の第３回目の展示会は資料がいっそう豊富で、平日にもかかわらず多くの入場者があり、本学構内遺跡の秘めた魅力を強く印象づけたようです。

センターの課題

24回におよぶ発掘の結果、センターの収蔵庫はすでに満杯に近づいています。センターの建物はまだ仮設なので、恒久的な保管施設の建設がこれからの課題になります。また大学の構内での発掘だから、調査成果や出土資料をもっと教育に生かすべきだという意見も聞かれます。センターの仕事はこれからも長く続くと思われますが、本学の教官・職員・学生のほか、ひろく地元のみなさんにも文化財の大切さを知っていただき、毎日の多忙な研究や勉学のあいまにも古代への夢を膨らませてもらえるようなセンターに成長していきたいと思っています。

よみがえる古代
－10年の調査成果から－

岡大キャンパスの遺跡　－縄文から現代へ－

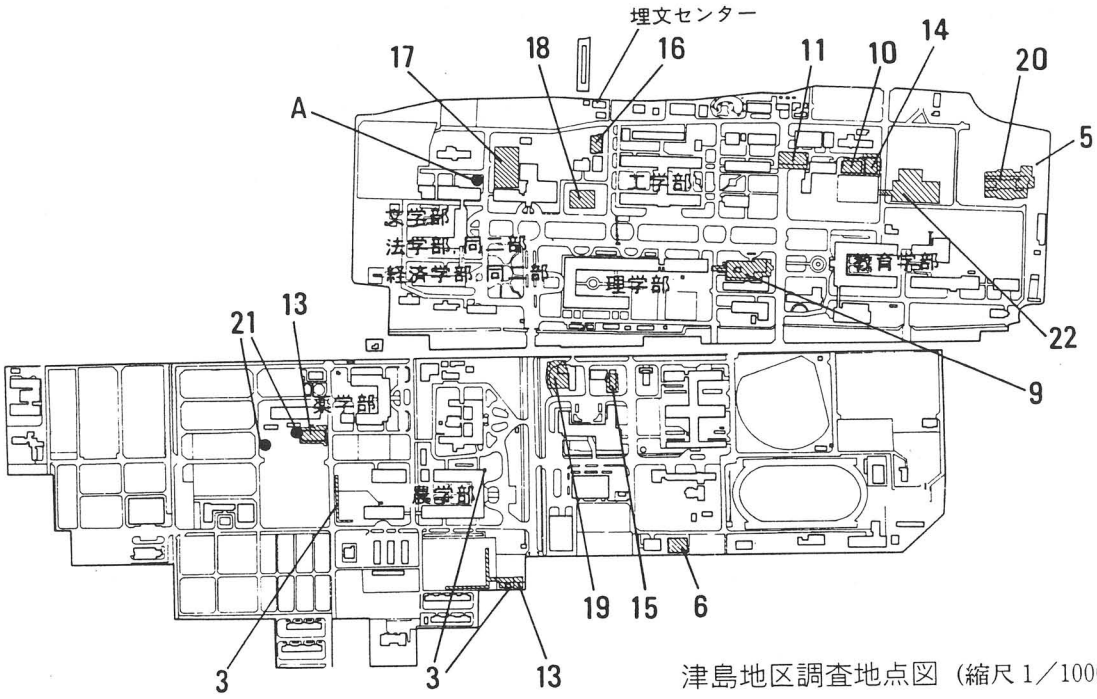
岡山大学構内遺跡としては、津島キャンパスに津島岡大遺跡、鹿田キャンパスに鹿田遺跡があり、過去13年にわたって岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが調査を進めてきました。両遺跡は旭川西岸に広がる岡山平野の北端と南端に位置します。近世以前の地形を復原すると、北に半田山山塊を背負う津島岡大遺跡と南に海をのぞむ鹿田遺跡というところでしょう。立地条件が対照的な両者は、遺跡の存続時期あるいは遺跡の性格面においても、おたがいに欠けた部分を補っているようです。

古くは縄文時代後期初め、今から約4000年も前にさかのぼります。当時の痕跡は、津島岡大遺跡にのこっています。現在とは違って、河川が網の目状に走り、狭い高まりや低湿地が点在する複雑な地形が広がる世界です。岸辺には貯蔵穴が群集し、すぐ側のやや高い土地には炉が頻繁に発見されます。数は少ないですが住居の跡も見つかってきました。ところで、津島キャンパス北東コーナーの北側に、縄文時代のゴミ捨て場である朝寝鼻貝塚があります。半田山の山裾ですが、近くに集落があったのでしょうね。津島岡大遺跡はその南に広がる沖積部にあたるわけで、安定した土地が比較的未発達であったことを考えると、ドングリの保存庫である多くの貯蔵穴、そして加熱作業を示す炉からは、ここに食料の貯蔵・加工を行うスペースが広がっていた可能性をうかがうことができます。このようにそれぞれの空間が機能的に利用される姿を復元できるかもしれません。また、質・量ともに豊富な遺物の中には、とても珍しい装身具や東日本と関連の深い文様の描かれた土器なども含まれ、西日本を代表する遺跡の一つとして評価が高まっています。

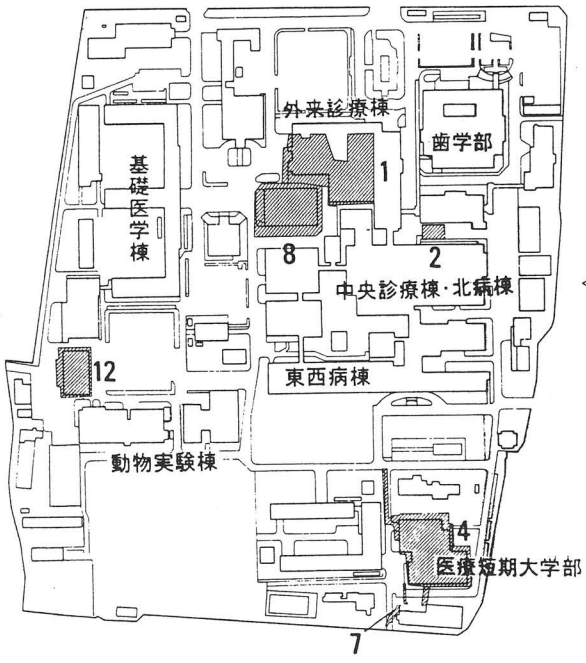
弥生時代は水田耕作で始まります。その初期の水田が津島岡大遺跡に残っていました。畦畔をおおう洪水の砂を取り除くと、地形にそってつくられた非常に小さな区画の水田がよみがえってきます。皮肉なもので、洪水という不幸な出来事が、今の私たちに多くのことを教えてくれています。その後、水田は近世まで連綿と続きますが、その間の大きな造成が土地に刻まれてきました。とてもよくわかるのは古墳時代後期、平安時代（10世紀頃）、室町時代の三時期です。まず、条里制の施行時期の問題にも深くかかわるのですが、古墳時代後期に北に方向をあわせた区画が一部で広がります。碁盤の目のように整然とした水田景観をイメージしてもらうといいかもしれません。平安時代には大規模な水利調節施設をもつ用水路の開発が進み、室野時代には古墳も破壊し、現在と同じ平坦な地形を完成させていきます。時代をおって規模を拡大する土地開発の歴史は現代に通じるようですね。

このように弥生時代に始まる耕地開発の歴史は、津島岡大遺跡によくのこっていますが、日常生活が営まれる集落の状況はどうだったのでしょう。鹿田遺跡がそのようすを示してくれます。

この遺跡は弥生時代中期後半から室町時代の初め頃まで続いた集落ですが、その始まりは津島岡大遺跡に比べてかなり遅れます。約2000年は時間がたっているかもしれません。その間、半田山の裾野付近に生活を開始した人びとは、しだいに南に広がる沖積部へ生活の範囲を広げ、ついに南端に位置する鹿田に達したわけです。気の遠くなるタイムスパンを感じますね。発掘調査では各時代の住居・建物・井戸・墓などが



津島地区調査地点図（縮尺 1／10000）



鹿田地区調査地点図（縮尺 1／5000）

【岡大構内遺跡の発掘調査】

＜1993年3月1日　埋蔵文化財調査室設置＞

1983年　**1.**鹿田遺跡１次調査（医病：外来診療棟）
　　2.鹿田遺跡２次調査（〃：NMR-CT室）
　　3.津島岡大遺跡２次調査（基幹整備）
1986年　**4.**鹿田遺跡３次調査（医短：校舎）
　　5.津島岡大遺跡３次調査（男子学生寮）
1987年　**6.**　〃　　４次調査（屋内運動場）
　　7.鹿田遺跡４次調査（医短：配管）
　　8.鹿田遺跡５次調査（医：管理棟）

＜1987年11月27日　埋蔵文化財調査研究センターに改組＞

1988年　**9.**津島岡大遺跡５次調査（大学院自然科学研究科棟）
　　10.　〃　　６次調査（工：生物応用工学科棟）
　　11.　〃　　７次調査（〃：情報工学科棟）
1990年　**12.**鹿田遺跡６次調査（アイソトープ総合センター）
1991年　**13.**津島岡大遺跡８次調査（農・薬・遺伝子実験棟）
1992年　**14.**　〃　　９次調査（工：生体機能応用工学科棟）
1993年　**15.**　〃　　１０次調査（保健管理センター）
　　16.　〃　　１１次調査（総合情報処理センター）
1994年　**17.**　〃　　１２次調査（図書館）
1995年　**18.**　〃　　１３次調査（福利厚生施設北）
　　19.　〃　　１４次調査（福利厚生施設南）
1996年　**20.**　〃　　１５次調査（サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー）
　　21.　〃　　１６次調査（農・薬・動物実験施設関連）
　　22.　〃　　１７次調査（環境理工学部）

※太字番号は図の中の番号に対応しています。

所狭しと重なり合って発見されます。長年にわたって住み良い村だったのでしょう。弥生時代では海辺の集落の特徴を示すかのように塩をとる土器や漁網のおもりなどが多く出土したり、高温で鉱物が溶けてガラス状になったカスが発見されます。当時の手工業生産のレベルは予想以上に高かったようですね。そのほかに、各時期を代表する土器の数かず、装飾豊かな甲（よろい）などの木製品、祭祀に使われたような様ざまな動・植物遺体などは、各分野の研究を進める貴重なデータとなっています。中でも、平安時代（９世紀）には、建物群や大形の井戸、そして橋の存在が当時の繁栄を示しており、また、当時、貴重であった物やめったに使われていなかった文字の資料などは、古文書で有名な「鹿田庄（しかたのしょう）」の中心となった集落である可能性を高めています。そして、集落の終焉は室町時代に入る頃（14世紀）でしょう。その直前、鹿田遺跡はそれまでにない大形の溝で区画され、瓦や仏具に多い銅椀（どうわん）、墓にたてる石製の卒塔婆（そとうば）である板碑（いたび）といった寺院に関連の深いものを残しています。村の性格の変化が匂ってきませんか。

ところで、こうした長期間にわたる村の生活にも数度の中断が認められます。繁栄の陰には衰退期もあったわけですね。弥生時代後期初頭、古墳時代後期、平安時代（10世紀）、そして終焉の室町時代（14世紀）の四時期に目立ちます。不思議なことに、この各時期は、津島岡大遺跡での土地開発の画期と一致するのです。さらに、弥生時代後期初頭、古墳時代前期・後期には、短期間で小規模ではありますが、津島岡大遺跡でも集落が見つかり、一部では平安時代に建物群があったことをうかがわせるデータも出始めてきました。両者のこうした関係は無関係とは言い難いでしょう。岡山平野全体で検討し、相互関係の解明を進めることが必要となってきています。

明治時代、津島岡大遺跡は旧日本陸軍の駐屯地に、そして、鹿田遺跡は医学専門学校にと、異なる道を歩み続けた両地域は、戦後になって岡山大学として統合されていきます。実に対照的な歴史を歩んできた両地域には、岡山平野の歴史が縮図となって端的に示されているかのようですね。

最後に、ここでは両遺跡に限定して説明しましたが、最近、固体地球センター（鳥取県三朝町）で、工事中に縄文時代早期にまでさかのぼる非常に良好な遺跡の存在が確認されました。今後、こうした遺跡の拡大も予想され、より広範囲の歴史解明に期待がふくらみます。

水田の調査風景

岡山大学 構内遺跡関連年表

西暦	時代		家と村	食生活	道具	装いと占い	戦争
BC 6000	縄文	早期	①				
		前期					
BC 2000		後期		⑤	⑦ ⑨	⑪	
BC 1000		晩期					
BC 300	弥生	前期					
		中期					
0		後期	③	⑥	⑧		⑬
	古墳	前期					
		中期					
		後期					
	飛鳥						
710	奈良		②				
794	平安		③ ④		⑩	⑪ ⑫	
1192	鎌倉						
1338	室町						⑭
1603	江戸						
1868	明治						
1912	大正						
1926	昭和						

[三朝地区]
三朝に人が住みはじめる
[津島岡大遺跡]
村ができる
ドングリの貯蔵
縄文の器
漆塗り櫛
石の道具
耳飾り
指輪
縄文ファッション
水稲農耕をはじめる
[鹿田遺跡]
村ができる（家・井戸・墓など）
戦士
吉備の甕
水利施設を整備する （大溝・杭列）
鹿田庄
中世の食膳具・木器
大規模な造成を行なう
この頃、半田山に城を築く
中世の鹿田村
井戸では牛骨の占いも
1907年 陸軍駐屯地
1949年 岡山大学創立
1901年 岡山医学専門学校創立

※丸数字はトピックの番号

家と村

縄文時代の三朝 ①

今から約8000年前、縄文人達は炉を囲んで生活していた。何を食べ、何を語り合っていたのだろうか。三朝ではそんな古い生活の歴史の一コマをみることができるのである。

埋められていた縄文土器（8000年前）

鳥取県の中部、三朝（みささ）町にある岡山大学固体地球センターの第２研究棟を建設する際に、縄文時代早期の終わりを中心として、中世にまでおよぶ複合遺跡が発見されました。三朝地区は、背後に山がそびえ、すぐに河原に接するところにあり、遺跡はちょうど山の裾の緩やかな台地から見つかりました。縄文時代の遺構もこの斜面にあり、当時の生活のありかたのわかる遺物などが見つかりました。

縄文時代の早期の終わりは今から約8000年前であり、当時の生活の様子の一端を示す痕跡を検出することができたのです。

三朝の縄文人は、小さな炉を中心に生活していたようで、この周りから石器や土器がたくさん集中して出土しました。柱の穴など、家の存在を示すようなものはなく、一時的なキャンプのような生活をしていたのでしょう。また、近くには土器を地中に埋め込み（写真）、中に石の道具を納めていました。

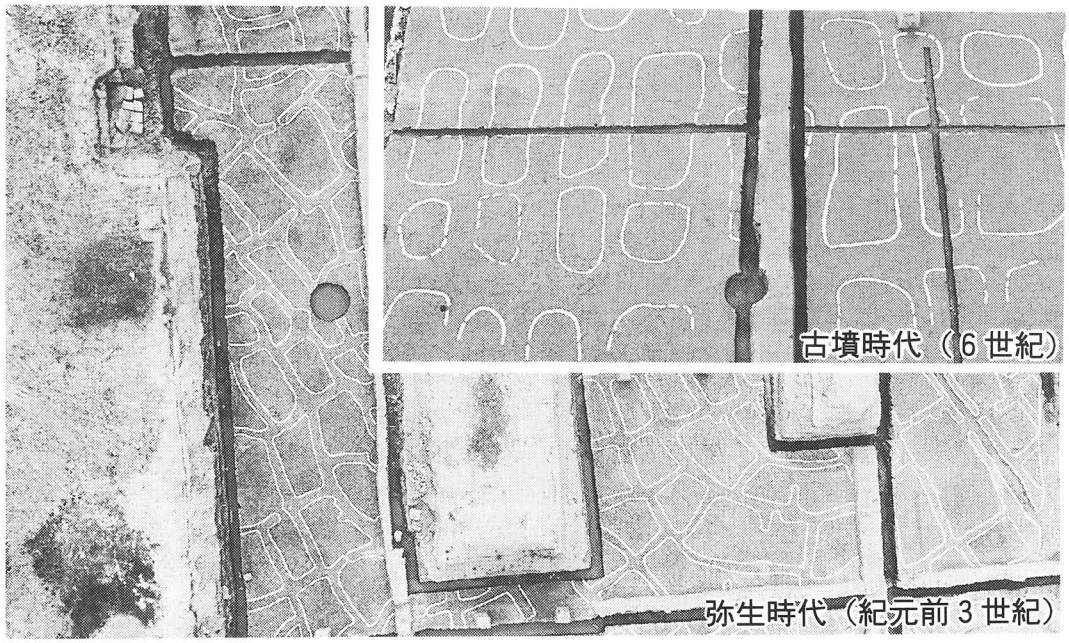
この土器はほぼ完全な形で出土しました。口は低い波形で、底は丸い形の土器です。表面に貝殻で条痕を施した後に縄を転がして縄文を施しています。口の下には紐状の粘土を一周させて、上に刻みを施しています。この土器は、山陰の日本海沿岸の各地から出土している土器の仲間と類似するものと考えられます。

この土器の中に入っていた石器は、サヌカイト製で、遠く讃岐から運ばれてきたものです。丁寧に刃を作りだしており、また頻繁に使用したのか、表面が摩滅していました。

このほか、隠岐島産と考えられる黒曜石の石器も出土しており、三朝の縄文人の活発な行動の一端を知ることができる貴重な資料といえるでしょう。

家と村　田園風景の軌跡－稲作の開始から現代まで－　②

2300年前に日本にもたらされた稲作は、時をおかずに津島一帯にもねづいていた。何度も洪水にあいながらも2200年にわたり連綿と稲作は続けられてきたが、陸軍駐屯地が設置されるとともに耕地としての歴史に幕を閉じる。



岡山大学の周りでは近年宅地化が進み、水田がめっきり減ってしまいました。今では一面に黄金色の稲穂が稔るのどかな田園風景を見ることは難しくなりました。

津島岡大遺跡では弥生時代前期（紀元前300年頃）から稲作を行っていたことがわかっています。この時期の水田はもっとも小さいたんぼ一枚の面積が約２ｍ四方という狭さで、これを「小区画水田（しょうくかくすいでん）」と呼んでいます。また、この時期は水利の関係から地形を最大限に利用して水田を作っているので、形状や大きさは整ったものではありませんでした。この傾向は古墳時代の後半まで続きますが、この古墳時代の後半になると畦の方向を方位にあわせた規則正しい水田畦畔（けいはん）が作られるようになります。これは条里制（じょうりせい）の出現を考えるうえで大変参考になる資料です。

さらに10～11世紀になると、ちょうど現在の馬場と図書館をつなぐ位置の地下に、まっすぐに東西方向の大きな溝が掘削されていることがわかりました。これは幅10m以上、深さも１m以上という大規模なものです。この大溝にはところどころに小水路が作られたり、杭列を打ち込んだ堰が築かれるなど、さかんに水利調整がなされていました。

次の中世になると、高いところは削り取り、低いところには土を入れて平らな耕地を作るという大造成が行われます。この層からは古墳に立て並べられていた埴輪が出土しており、この時期に古墳をも破壊する大造成がなされていると推測しています。このような土地開発の歴史はいわば水との戦いの歴史でした。その後も津島岡大遺跡は耕地として利用され、明治時代を迎えます。明治時代には陸軍駐屯地を作るため大規模に造成され、ついに2200年間続いた耕地としての役割を終えます。今では大学の南西の一角に残る実験用の農地だけがその面影をとどめています。

家と村

井戸を掘ってみれば ③

古代の人びとは水を手に入れるために、私たちの何十倍も苦労していた。水への畏敬の念から、井戸は単に水を汲むための施設ではなく、祭祀と儀式の対象となった。

井戸枠

井戸は水を得るための施設です。昔の井戸も水脈めがけて深く掘りこまれています。井戸として使用されていた場所からは、今でも調査の最中に水が湧き出て、しばしば調査員を悩ませます。発掘調査で見つかる井戸は、人びとが使わなくなった状況のものですが、その中からは私たちのライフスタイルから想像もおよばないようなものが時として出土します。

鹿田遺跡では弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代の井戸がそれぞれ見つかっています。古墳時代は素掘りの井戸が中心です。井戸を廃棄する時には、その底にまだまだ使える土器をたくさん置いていくようで、しばしば多量の土器が出土します。また土器とともに桃の種などが見つかることもあります。平安時代には井戸枠に大木をくりぬいたものを使っているものがありました。井戸の底からたくさんのまじない用の道具が出てきました。鎌倉時代も井戸枠には木を用いていました。ある井戸を掘っていくと、底付近の四隅に小さな皿がつきささっていました。さらに中央には牛の頭蓋骨が鎮座していました。さらに、ほぼ同じ時代の井戸から、馬の骨が見つかったという例もあります。

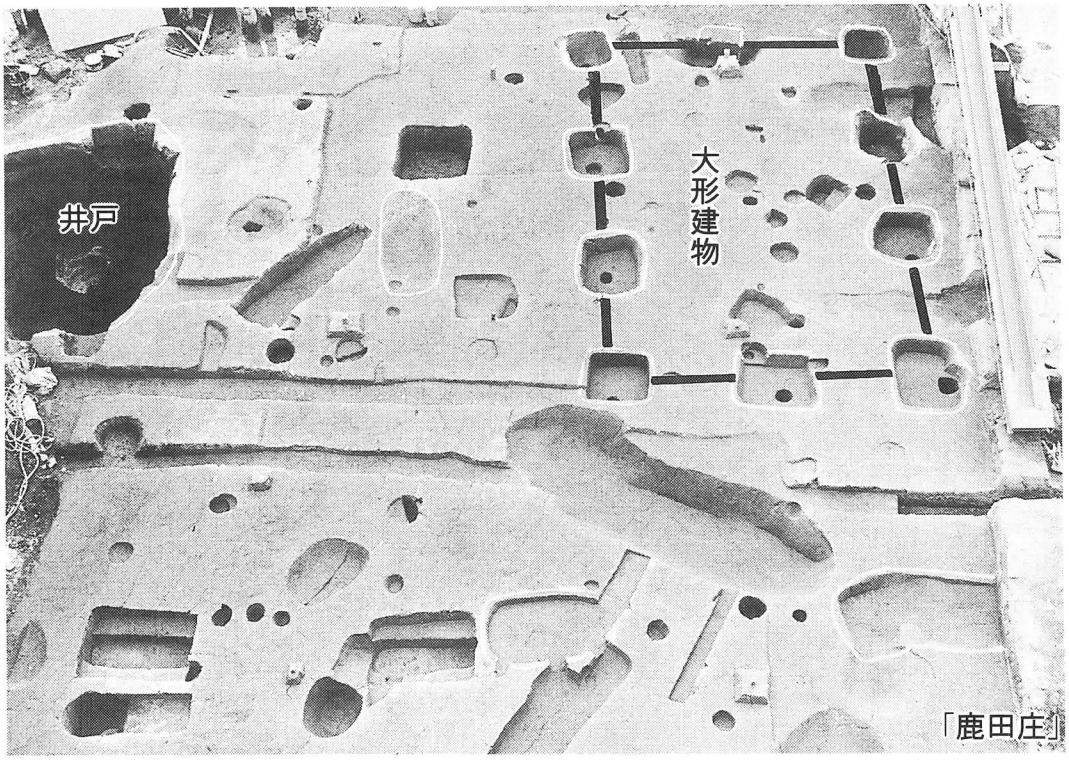
古代の人びとは、井戸の使用をやめる前に、そのまわりで儀式を行っていたようです。井戸の底から見つかるものは、井戸を捨てる時に行ったその儀式のなごりだと考えられています。こうしてみると、苦労して水を手にいれなければならかった当時の人びとの、水や水に関わる施設にたいする畏敬の念がしのばれます。

家と村

古代の鹿田

④

棟をそろえて建ち並ぶ建物と大形の井戸。都の香り漂う様々な遺物。有力貴族である藤原氏の荘園として古文書に姿をみせる「鹿田庄」の故地として、当時の繁栄を伝えている。



「鹿田」の名は、古文書では藤原摂関家の最も大切な荘園の一つ、「鹿田庄（しかたのしょう）」として有名です。備前国司の焼き討ち事件、港湾都市の記載、さらに絵図にも姿をみせます。現在、その名は鹿田キャンパス（鹿田遺跡）につたわっています。

調査で見つかる柱のあとから建物のようすが想像できます。大形の建物が棟をそろえて建ち並び、井戸には井筒（刳り抜きの井戸枠）がのこっています。井筒は径１m・高さ2.4m以上、厚さ10㎝の大きさを誇るものもあるんですよ。それは杉の大木を丁寧に加工しており、地方ではめったにない立派なものです。当然井戸も大きく掘られ、径は約４m、深さは3.6mもあります。底には、まじない札のような斎串（いぐし）、刀子（とうす）、櫛などが入っていました。これらは都で行われる祭祀の道具に共通しています。そのほかに、赤色・黒色という特別な色彩の容器、墨がたっぷりと付着した硯（すずり）や「専」「玉」「田」などの文字が書かれた容器、官位を示す石製のベルト飾りである「石帯（せきたい）」なども見つかっています。いずれも庶民にはとても手の届かない品じなです。文字を日常的に書く人、都の儀式に精通した人、そんな人たちが住んでいたのでしょうか。遺跡の南側では、橋脚と考えられる大きな杭が並んで見つかりました。人びとの盛んな往来が目に浮かびませんか。

こうした背景には豊かな財力、支配力があったのでしょうね。文書作成を行う役所のような役割を果たした場所。つまり、平安時代の頃、鹿田の集落が鹿田庄の荘官の居宅地であった可能性が強まっています。当時、この地域の南には海が迫っていました。絵図にあるように海と河川の交通の要衝に位置し「市」がたち、物資の流通拠点としての「鹿田」の賑わいがよみがえってくるようです。

食生活　縄文人の生活の知恵－ドングリの里　津島ムラー　⑤

狩猟・採集の時代とされる縄文時代。手にいれた動物や魚、木ノ実などを、素材そのままの簡単な加工ですませるその日暮らしの生活。そんなイメージはありませんか？

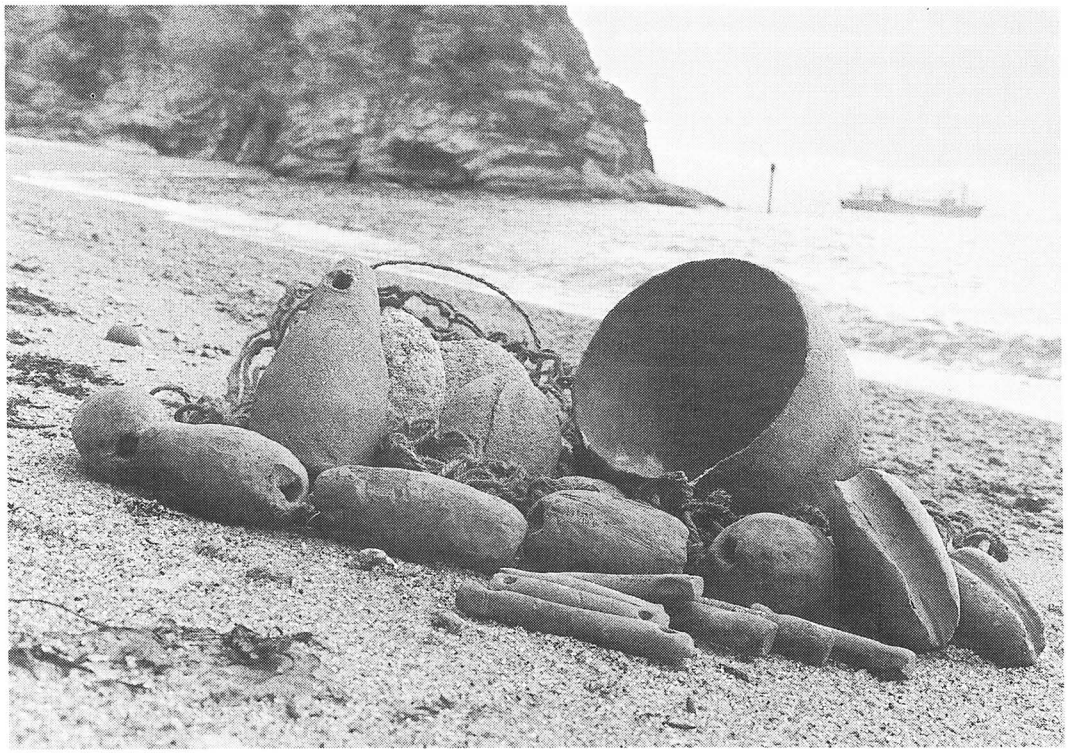
貯蔵穴調査風景　　縄文時代（4000年前）のドングリ

人びとは何をどのように調理していたのか。興味深い問題ですね。ここで、津島岡大遺跡でわかってきた一例を紹介しましょう。遺跡の地下３～3.5m。そんな深い所にひろがる縄文時代の世界は、現代とは全く違った景観を見せてくれます。今のような平坦な地形が嘘のようで、大小の河が、網の目状に走っているのです。想像できますか？岸辺には径0.8～２m、深さ0.5～１m程度の丸い穴が群集して頻繁に姿をあらわし、中にはアラカシ・トチなどのドングリが残っています。厚さ20㎝以上、100ℓ以上のアラカシが詰まっていたり、土器やカゴのような編み物も入っていることもありました。どうも大量のドングリを蓄えた貯蔵用の穴だったようですね。

現在も山間部「名産トチもち」などがありますが、縄文人もドングリを食べていたでしょう。ドングリはそのままでは半年以上の保存はできません。虫に食われたり硬くなってしまいます。でも、岸辺の穴に水に浸かるようにして上部をおおうと、安定した低温と湿度や空気の遮断で１年以上の保存ができるようです。天然の冷蔵庫ですね。これで年間の食料が確保できます。「生活の知恵」ですね。ただ、多くのドングリは渋が強くてアク抜きなしでは食べられません。加熱や粉末作業があったはずで、遺跡で見つかる炉や煤けた多くの土器、石皿などがそれを物語ってくれます。それに水さらしは特に重要です。水漬けに近い貯蔵方法はこうした作業に有効だったかもしれません。料理への素晴らしい知恵をうかがうことができます。きっと食卓は賑やかだったことでしょう。毎年秋には降ってくるドングリは、縄文人の生活を豊かにする恵みの雨だったのかもしれませんね。

食生活　漁民の生活－石錘・土錘・蛸壷・製塩土器－　⑥

人間は母なる海からさまざまな恩恵を受けている。古代人も海からいろんな恵みを受けてきた。その証拠が鹿田遺跡にもたくさん残されていた。



現在の海岸線は近世の大規模な干拓によって南に大きく後退しました。しかし、鹿田遺跡に人が暮らしていた弥生時代・古墳時代・平安時代には海岸線は鹿田遺跡のすぐ南に迫っていました。彼らは海からさまざまな恵みを得るためにいろいろな道具を作りました。石錘（せきすい）・土錘（どすい）・蛸壷（たこつぼ）・製塩土器（せいえんどき）がそれにあたります。

石錘・土錘は網にくくりつけておもりにしたものです。このようにして作った網は魚を獲るのに重要な道具でした。魚は古代人にとって動物性たんぱく質を摂取するための重要な栄養源です。したがって道具にもさまざまな工夫が凝らされており、石錘にはしっかりと網にくくりつけるための窪みをつけ、また土錘には焼く前に網糸を通すための穴を開けています。

タコもまた瀬戸内の珍味。このタコを捕るための蛸壷が鹿田遺跡の平安時代の層から出土しています。この蛸壷は器高約９cm、口径約４cmと小さいものです。

海辺の集落では塩づくりも盛んに行われていました。塩は人間が生きていくためにはどうしても摂取しなければならないものです。このころの塩づくりは海水を汲み上げて土器で煮詰めるというものでした。この煮詰める過程で使われた土器が鹿田遺跡で出ています。この土器を製塩土器といいますが、一度海水を煮詰めるのに使用すると壊れてしまいます。したがってその作りは非常に粗いもので、塩づくりのたびに製塩土器を作る必要がありました。塩を作るためには製塩土器の製作から海水の汲み上げ、海水の濃縮、煮沸など、大変な労働を強いられたことでしょう。このようにして作られた塩は貴重品として取り引きされたのです。

道具

縄文時代の容器

⑦

縄文時代は、土器の時代のはじまりである。約１万年の間、形や文様など世界に例を見ないほどの豊富な内容をもっていた。そのほか、ザルやカゴなどもたくさんもちいられた。

縄文時代（4000年前）　　編みカゴ

縄文時代は約１万年も続いた狩猟と採集の文化です。縄文時代の始まりは、土器の登場の時代でもあります。縄文人達は、海山の幸をたくさん取ってきて、調理や保存をしました。最も革命的であったのは、煮るという調理方法が土器の登場によって進んだことです。これにより、それまで食べることができなかったものが食べれるようになり、グルメな縄文人の生活がはじまりました。岡山大学の津島キャンパスではたくさんの縄文土器が出土しています。その多くは縄文時代の後期（紀元前2000年）のものです（写真左）。この時代の土器の表面には、縄を転がして、部分的に指などでそれを磨り消して文様を形づくる手法が盛んに用いられました。土器の形は変化に富み、口が波形のものや平らなものなどいろいろです。日常に使われた鍋やお祭りに使われた特殊な土器など、さまざまな用途の土器があります。現在では、どのような時期の縄文土器でも、破片をみればいつごろの時代のものかすぐにわかるほど研究は進んでいます。

土器以外の容器も見つかっています。写真右は、拾ったドングリなどを入れるカゴです。ていねいに編まれているのがよくわかります。縄文時代の川辺にあった貯蔵用の穴のなかから出土したものです。ふつうでは腐ってなくなってしまいますが、水に浸かっていたために残っていたのです。私たちがいま目にすることができるのは、土器のように腐りにくいものがほとんどです。しかし、カゴのように有機質で腐りやすいものを丹念に発掘していくことにより、実際に縄文人達が使っていた容器の全貌を明らかにできるのです。

道具

吉備の甕 ⑧

弥生時代から古墳時代へと社会が変化する頃、驚くほど薄手の「甕」が吉備南部地域に広がる。規格性を強く示すこの煮炊具は集団のまとまりを示すかのような動きをみせる。

「吉備の甕」。いったい何だろうと思いますね。「甕」は弥生～古墳時代の煮炊きする土製の容器です。つまり、当時、広島県東部～岡山県南部地域で使われていた「土鍋」でしょうか。

そんな日常具を、ここで…？　そのわけは、形や捨てられ方などに独特な状態があるからです。形は？というと、「手にしたときの驚くほどの軽さ」が特徴を物語っているといえるでしょう。秘密は器壁の薄さにあります。径17㎝・高さ30㎝程度の大きさの土器が、内面を削りそして押さえるという方法によって、何と厚さは１㎜に仕上がっています。全国的に誇れる高度な技術力があったのでしょうね。ほかにも注目できる点があるんですよ。端正なプロポーションやどれも同じような粘土で作られていること、丸底になっていく点は、それまでの伝統的な甕には認められていません。

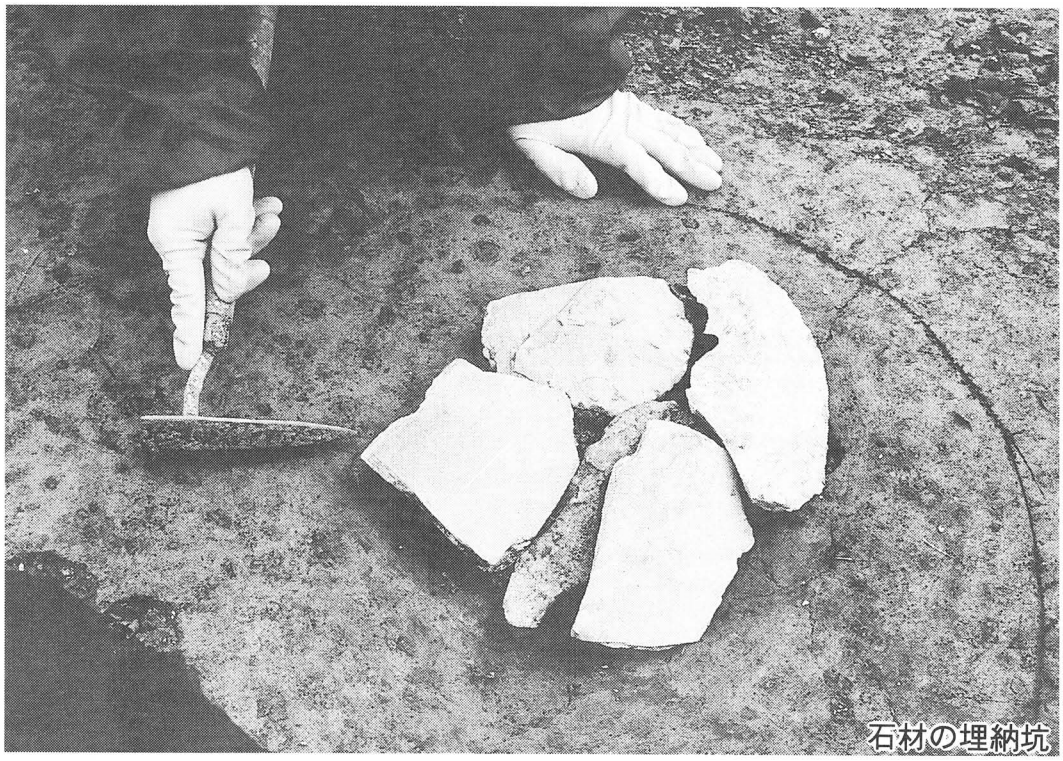
また、捨てられ方にも意外な面があります。「まつり」が行われたような井戸からは、従来は壺や高杯というきれいに飾った容器が多く入れられていました。祭の道具として納得できますよね。ところが、弥生時代の終わり頃から、この甕が出てくると入れ替わってしまいます。ご飯のふきこぼれが残り、真っ黒に煤けた甕。どうみても日常品ですよね。どうしてなのでしょう。

「吉備の甕」が流通する時期は、弥生から古墳時代へと社会が大きく変わる激動期に一致します。この甕に見られるさまざまな要素は、新たな社会への始まりをうかがわせているようにも思えるのです。「吉備の甕」。多くの謎を秘めて…、研究者たちが注目する遺物の一つです。

道具

運び込まれた石の道具 ⑨

遠く香川県から運ばれてきたサヌカイト。海を渡った石は、加工されさまざまな道具がつくられた。金属を知らない時代、生活を営んでいく上で欠くことのできない物であった。



石材の埋納坑

縄文時代や弥生時代のようなまだ金属がほとんど手に入らない時代に、縄文人や弥生人達は石の道具を使い、木を加工して家や農具などを作ったり、芋を掘ったり、稲刈りをしたのです。津島キャンパスをはじめとして岡山県の南部では、河原に転がっている礫（れき）などを使う石器は別として、石器を作るための石材の原産地がありません。他の場所から石材を持ち込んでくる必要がありました。

津島キャンパスから出土する石器石材の大多数は、香川県のサヌカイト（讃岐石）です。津島キャンパスの縄文人達や弥生人達は、海を渡ってこうした石材を入手する必要があったのです。彼らは讃岐石を産する山へ行き、まず電話帳ほどの大きさの原石を携え、船で海を渡り村へ持ち帰ります。研究者によっては、原石が別の供給センターとでもいうべき村を経由してもたらされるという主張もあります。ここでは、自分たちで持ち帰ったという前提で話を進めます。持ち帰った原石は、作られる石器の大きさにより粗割りし、さらにそれぞれ細かい打ち欠きを行って目的の石器を手にするのです。

こうした石材入手の不便さは、石器を作る技術等にも反映しており、細かい石のかけらをも使っていました。さらに、津島キャンパスの縄文人や弥生人達は使用中に壊れてしまった石器をさらに別の石器の材料にして使い尽くしました。

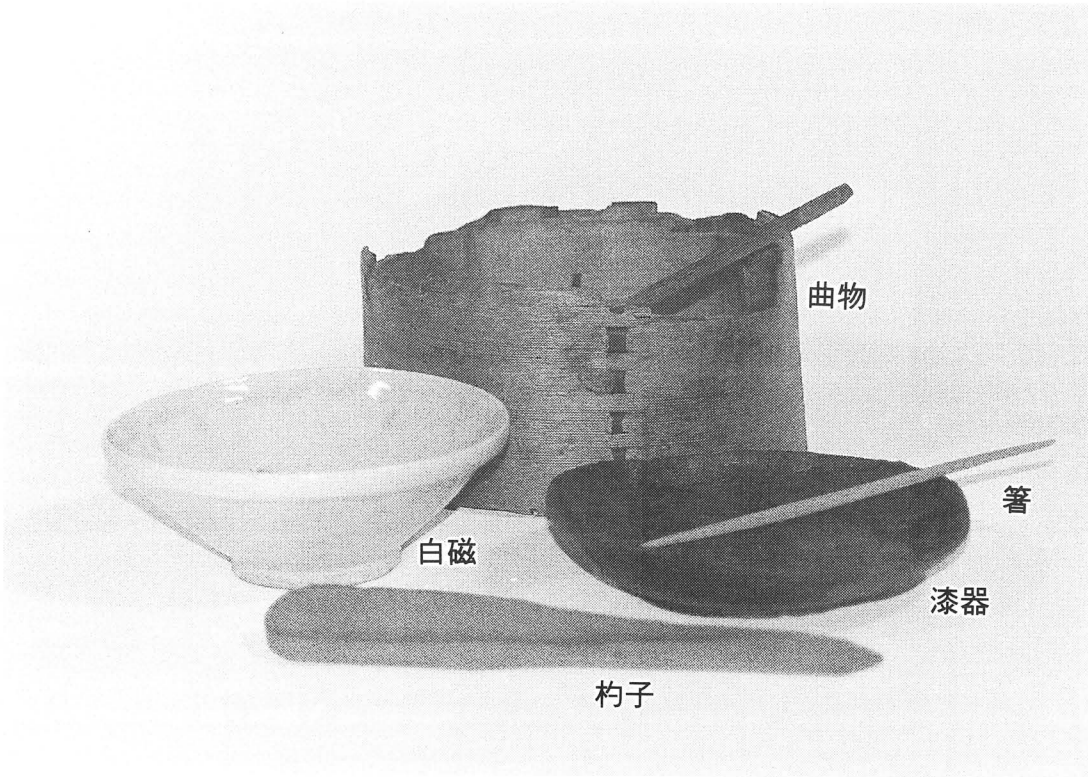
縄文時代と弥生時代では、原石の入手の方法に違いがあるかもしれませんが、石器を作る技術は基本的には変わりません。むしろ、縄文時代も弥生時代もともに石材を大事にして余すところなく利用していました。当時の人達の苦労の様が目に浮かぶとともに、むだづかいの多い現代人にとって教訓となるでしょう。

道具

木の道具にまつわること

⑩

古代の人は、木をさまざまなところで活用していた。鹿田遺跡からは日用雑器、装身具、遊具、建築部材などが出土している。およそ木のない生活など考えられなかったであろう。



幼い頃読んだ童話に、二人のきこりが池に斧を落としてしまい、それを女神に拾ってもらうというお話がありました。女神は落とした斧が金でできていたか、鉄でできていたかと問い、正直者は鉄と答え、欲深いほうは金と答えました。

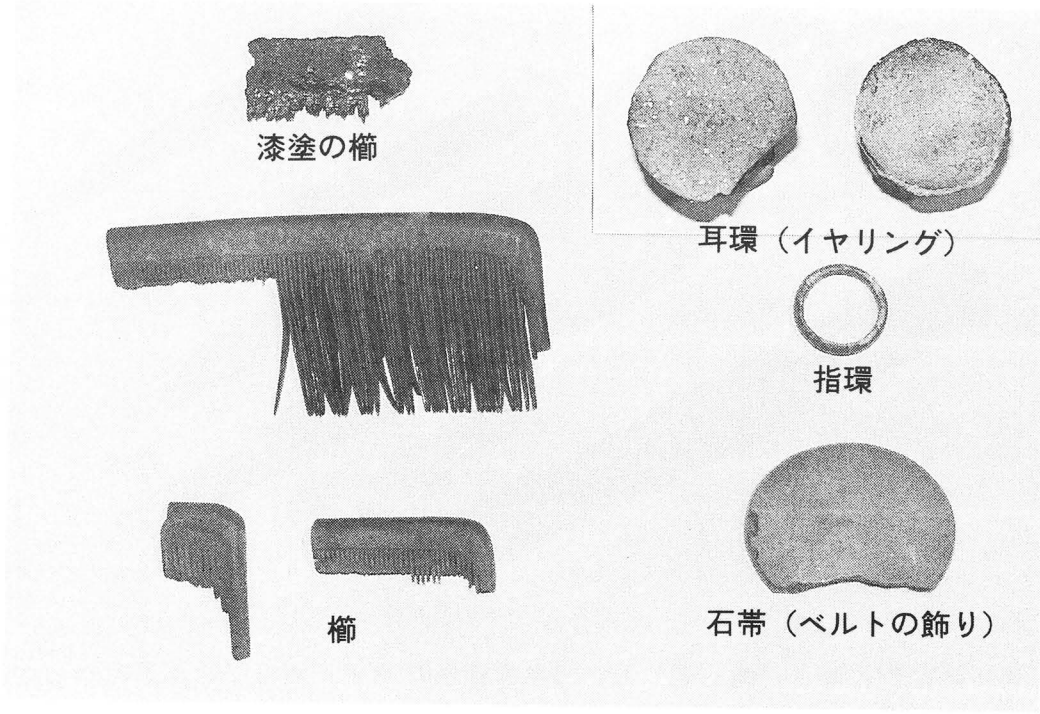
それでは、平安時代の人が池にお椀を落としたとして、拾ってもらうなら白磁か、素焼きか、それとも漆器のお椀か、どれを喜んだでしょうか。それは白磁か漆器のお椀でしょう。白磁のお椀は、中国から輸入していた高級品で、庶民にはなかなか手の届かない品でした。素焼きの白いお椀は、白磁（写真左端）をまねしてつくったもので、形や色がそっくりです。まがい物でもいいから手元に置きたいという当時の人びとの白磁への憧れがしのばれます。木でできた漆器も当時高級品でした。鹿田遺跡では白磁の椀と黒塗りの漆器が出土しています。

この当時、食器以外にも木でできた道具は身近にたくさんあったようで、鹿田遺跡では井戸の中から見つかっています。台所まわりでは箸や杓子やすりこ木、万能容器の役割を果たしていた曲物、身につけるものでは下駄や櫛、扇子が出土しています。また、遊び道具に使った毬も木で作られていました。遺跡から見つかる木の道具は、実際に使われていたうちのほんの一部です。木は土の中で腐ってしまい、あとかたが無くなってしまうからです。私たちが目にしている木の道具は、井戸などの水づけになって腐らない環境下にあったところから出土したものです。

装いと占い

ファッションの歴史 ⑪

人間は旧石器時代からアクセサリーを身につけてきた。ファッションは装っている人の身分を示すしるしとなった。アクセサリーをつけて鏡を見る。鏡に映しだされた姿は、ファッションを生み出した時代をも映しだしている。



最近の街を歩く若者たちはファッションに非常に敏感です。流行をいち早く取り入れておしゃれをします。でもおじいさんやおばあさんも若い頃はおしゃれ心があったでしょう？同じように縄文時代や弥生時代に生きた人びともやはりおしゃれをしていたのです。岡大キャンパスの遺跡にも古代の人びとのファッションを垣間見ることができる遺物があります。それでは古代人のファッションを見ていきましょう。

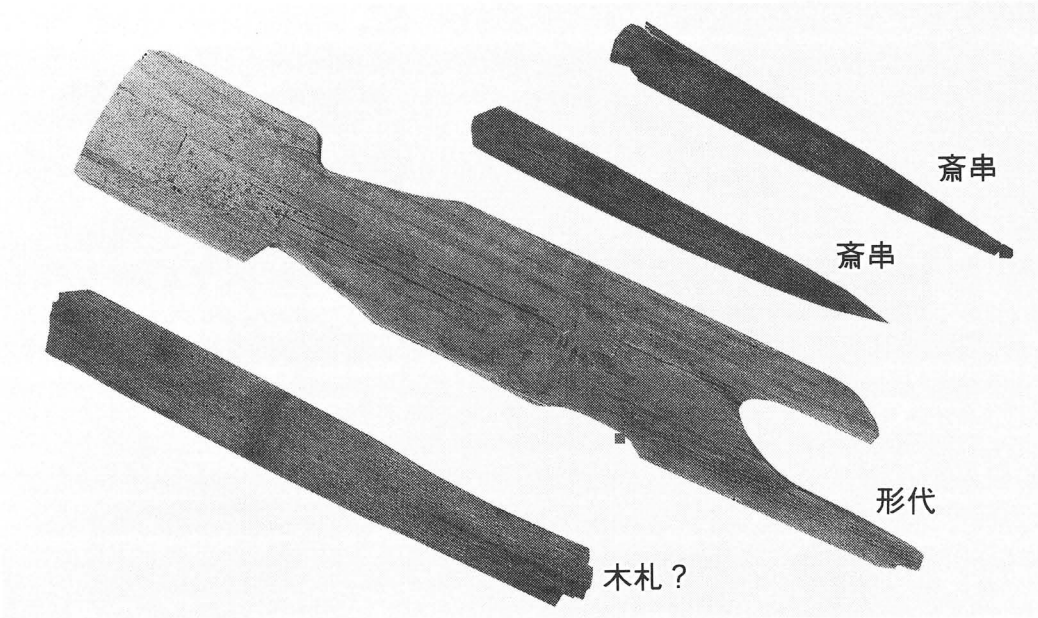
津島キャンパスでは縄文時代の櫛、耳飾り、指輪が出土しています。櫛は歯を束ねて上部で固定し、さらに全体に漆を塗って飾っていました。耳飾りは土製のものですが、表面に水銀朱を塗って赤色に着色していました。この耳飾りは耳たぶにはめて使っていました。指輪は石製で直径1.8cm、内径は1.4cmで、成人女性では小指に入れるのがやっとという大きさです。

一方、鹿田キャンパスの弥生人は顔に入れ墨をしていたことが、土器に描かれた絵画からわかっています。また倭人が顔に入れ墨をすることは有名な『魏志倭人伝』にも出てきます。このような人面土器は全国的にも例が少なく、弥生時代の習俗を知るうえで貴重な手がかりとなります。

つぎに身分を示す装いについてみていきます。鹿田遺跡では古代の石帯が出土しています。身分制度が整備されていた古代では、このような装いは身分によって決められていました。石帯では材質や形、大きさで身分が表現されていました。この時代にはファッションが権力者の道具とされていたのです。

装いと占い　古代のまじないグッズ　⑫

祓い、清め、呪い、願う。古代の人びとの精神世界が投影されたまじないの道具。形代に斎串、牛馬の骨、古代の人は何を祈ったのか。



日本には古くから‘流し雛’という風習があります。女の子にふりかかってくるであろう災いや病気などを、雛人形に身代わりとしてかぶってもらい、川や海に流す行事です。女の子が無事に育ちますようにという祈りの一端でしょうか。

平安時代にも、これと似たような風習がありました。津島岡大遺跡から出土したまじないの道具の中には、形代というものがあります。これは長さ50㎝、幅10㎝、厚さ１㎝程度の人の形をした木製品です。この形代はその体を撫でて、口づけするといった使い方をします。一撫ですることで体についている穢れが全て形代に移り、口づけすることで体内にある病気が全て形代に移ると考えられていました。形代が人間の身代わりとなって、穢れや病気を引き受けてくれたと考えたようです。こうして不浄のものを背負わされた形代を川や水路に流してやれば、人間は新しくよみがえり、清浄なものになるという思想があったようです。今でいう無病息災を祈ったのでしょうか。津島キャンパスから出土したこのまじない用の形代もそれを裏付けるかのように、大きな水路から出土しました。さまざまな穢れを引き受けた形代は、水路から河川へ、そして海へと向かい、海中深くで消滅していったのでしょう。

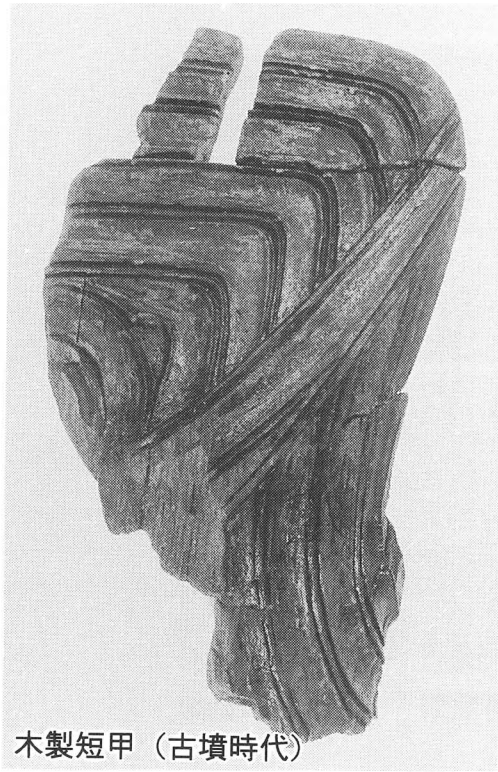
平安時代のおまじないに欠かせない道具として、鹿田遺跡から出土する斎串というものがあります。斎串とは、長さ20㎝、厚さ3㎜前後の木製の薄い板で、上端には切れ目が入ります。これは祭祀のための結界を張る道具と考えられています。結界を張って不浄なものが入らないようにし、その中で雨乞いのような儀式を行ったのでしょう。また、こうした水に関連した儀式では、牛や馬の骨を用いたようです。各地の発掘調査で、井戸や池、水田など水に関連した場所から、牛や馬の骨が出土しています。牛馬も重要なまじないの道具でした。鹿田の人びとも豊か水の恵みを祈ったのでしょう。

戦争

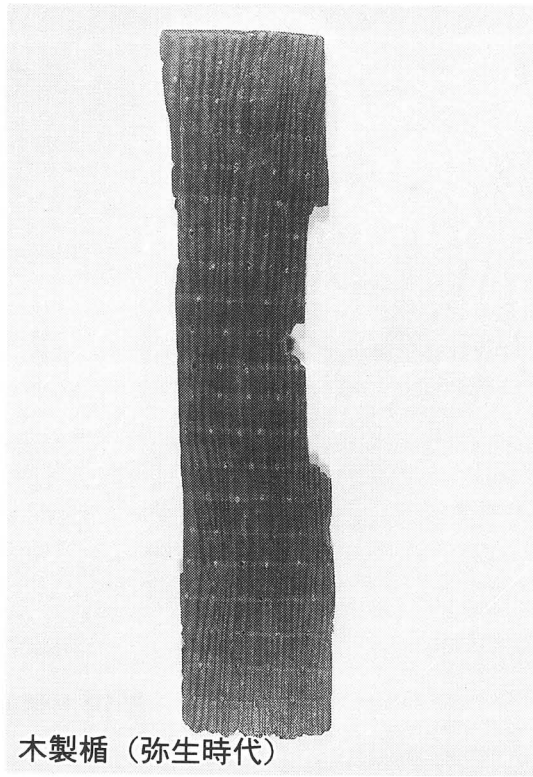
戦士の装備

⑬

甲を身にまとい、楯で攻撃をかわし、弓矢や剣で戦った。古代の戦士の装備は、当時の技術の粋を集めて作られたものだった。



木製短甲（古墳時代）



木製楯（弥生時代）

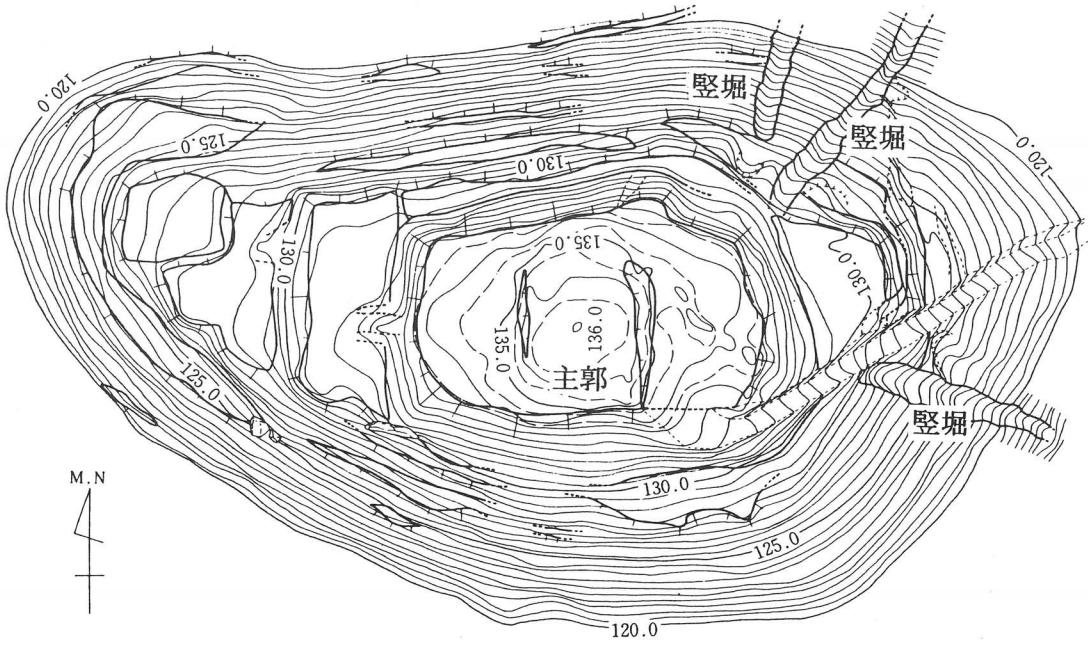
戦いという行為はいつから始まったのですかという問いには、弥生時代からだという答えがよく返ってきます。全国的に見ても弥生時代以降の遺跡からは多くの武器が出土しており、それを裏付ける証拠となっています。

このセンターにも、鹿田キャンパスから出土した古墳時代初め頃、約1700年前の木製の甲（よろい）があります（写真左）。胴体部分にぴったり沿うように作られており、人間の体の微妙なカーブが表現されています。また、表面を細かく彫刻した上に漆を塗るなど手の込んだ作りをしています。実用品というよりは「飾られた武器」、儀式用と考えられています。こうした飾られた武器の裏には石や鉄でできた矢尻といった幾千幾万もの実用武器があり、弥生時代や古墳時代にも戦いが頻繁に起こっていたことが分かっています。津島キャンパスから出土した木の楯もこうしたことを物語る資料の一つです（写真右）。この楯は弥生時代後半で約1800年前のものです。板材に5㎜前後の穴を等間隔にあけて、植物のツルを通して補強しています。これは楯の強度を増し、矢を受けても割れて壊れないようにするための工夫です。

こうした精巧な木の武具を製作する技術は、木の容器や道具を作る技術の中からつちかわれてきたものです。それは、現在でもさまざまな工業技術が、兵器を製作する技術に応用されていることにも似ています。遺跡から出土した甲や楯も、古代の精巧な木工技術で作られたものです。しかし、こうした武具や武器で多くの人が傷つき死んでいったことを想像させずにはいられない一品です。

戦争　半田山にお城があった－半田山城－　⑭

その昔、半田山にはお城があった。今では草木が生い茂り、戦乱の時代の面影をとどめてはいない。しかし残された郭は私たちに戦国の歴史について語りかけてくるようだ。



半田山城跡測量図　（縮尺　1/1200）

半田山城（はんだやまじょう）は半田山の山頂に築かれた東西の長さが140m、南北の幅が70m以上ある「連郭式山城（れんかくしきやまじろ）」とよばれるものです。これは城の中心の「主郭」を挟んでその左右にいくつかの郭（くるわ）が連なるというものです。半田山城の場合は主郭の東側に１つ、西側に３つの郭があります。また、東側には３条の「竪堀（たてぼり）」があります。石垣や水をはった堀などは見られません。このような半田山城の大まかな構造は以前からわかっていたのですが、詳細な構造は1989年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが行った測量調査で明らかになりました。このような構造に見られる特徴から、半田山城が築かれたのは戦国時代の前期より前ではないかと考えられますが、正確な年代は今後の調査にゆだねられています。また、どのように機能していたかもはっきりしていません。おそらく戦いの際の逃げ城のようなものだったのでしょう。

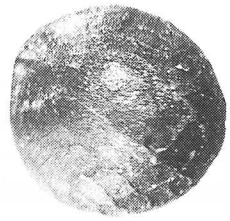
津島周辺には半田山城をはじめとして多くの山城があります。これらの山城をめぐる記述は『太平記（たいへいき）』や『中国兵乱記（ちゅうごくへいらんき）』などのいくつかの文献にも出てきます。この地域にこれほど密に山城が築かれた要因として、山陽道が通っていたこと、旭川沿岸の肥沃な沖積地をひかえていたことなどが考えられます。

津島岡大遺跡の中世の遺構は水田が主体です。この水田だけを見ると秋には一面に黄金色の稲穂をつけた、のどかな田園風景を想像しますが、背後の半田山には山城がひかえており、民衆は実際には戦乱の時代をくぐり抜けながら生きぬいていたのです。

遺物の科学 ⑮

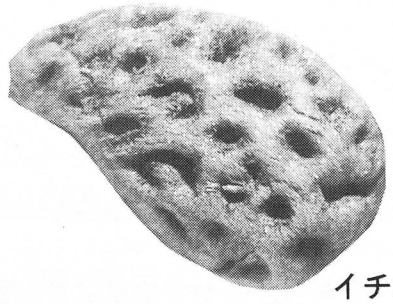
1点の遺物から歴史が変わることがある。遺物の理化学研究があり、そうした研究の最先端に、生物学・化学・物理学等の分野との協力により大きな成果が得られている。

ブドウ



シソ

生物顕微鏡で
拡大視したイネの
プラントオパール



イチゴ

実体顕微鏡でみた種子

遺物の理化学分析では、じつにいろいろな自然科学分野の研究者との共同研究により、興味深いことがわかっています。特に種子、木製品、灰像分析等、古代の食生活にかかわる分析は注目されています。

まず、種子などは遺跡から土ごともってきて、ていねいに水で洗い選別します。そして、選別した種子は、植物学の専門家の協力をえて、すべてその種類を同定します。こうした分析の積み重ねの結果、岡山大学では、特に縄文時代後期の遺跡から出土した種子のなかに、栽培がおこなわれていたことを示す種子がたくさんみつかりました。また、縄文時代の土器のなかに含まれたイネのプラントオパール（植物珪酸体）がみつかり、縄文時代に稲作がおこなわれていた可能性もでてきました。現在では、縄文時代の農耕の問題を考えるうえで、岡山大学構内遺跡調査の成果による分析結果は学界でも注目されています。こうした分析は、常にどの時代についてもおこなわれており、たとえば、井戸の土のなかから炭化した種子を抽出し、電子顕微鏡観察をおこなって米であることを突き止めるなどの成果があがっています。

農具や杭など、たくさんの木製品についても理化学分析がおこなわれています。古代人が何の木を用いていたのか、どこから持ってきたのか等を明らかにするために、専門家による同定作業がおこなわれ、着々とデータが蓄積されています。

このように、考古学の研究は常に他の分野の協力により、古代の歴史復原をおこなっています。遺物の理化学分析が今後進めば、古代の歴史がどのようにかわるか、はかり知れません。

遺跡・遺物の科学

出土遺物の保存処理 ⑯

遺跡から出土した遺物は、そのままの状態で放置しておくとさまざまな化学変化によって朽ち果ててしまう。そのため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは化学的な処理を施し、遺物の恒久的な保存に努めている。

木製品の保存処理風景

炉跡の保存処理

岡山大学構内遺跡からは多くの土器や石器、金属製品や木製品が出土しています。これらの遺物は地中に埋没したあと、長い年月にわたって安定した環境に閉じこめられて保存されてきました。しかし、発掘調査によって掘り出されると、土の中の安定した環境から外に移されるため、周辺環境が急変し、遺物の状態に深刻な影響を与えることがあります。

私たちはこのような遺物の保存をはかるため、さまざまな保存処理を行っています。とくに岡大構内遺跡は低湿地性遺跡のため、木製品が良好な状態で発掘されます。これらの木製品は豊富な地下水によって水づけにされた状態ですので、この水が乾燥すると木製品は収縮し、変形して、ついには壊れてしまいます。そこで木製品の組織を満たしている水を、常温では乾燥・蒸発しないポリエチレングリコール（PEG）という樹脂に置き換えていきます。この処理はまず低い濃度のPEG溶液に木製品をひたし、約２か月ごとに少しづつ濃度を上げていき、約１年半かけて完全に組織に含浸させていく、という非常に手間と時間のかかるものです。しかし、この作業によって木製品の組織は乾燥しても変形しなくなり、恒久的に保存することができるようになるというわけです。岡山大学埋蔵文化財調査研究センターではこの木器処理を行うための施設を有しており、これまで多くの木製品の保存処理を行ってきています。

そのほか、遺跡で見つかった炉を発泡ウレタンと呼ばれる固定材を流し込んで周囲の土ごと固めたあと、地面から切り離して持ち帰っています。このようして遺跡から持ち帰ったことにより、この炉はセンターの展示室でいつでも見ることができるようになりました。

このような保存処理は埋蔵文化財調査研究センターの重要な成果の一つとなっており、これからも新たな方法を研究・導入して、さらに多くの遺物の保存を進めていきたいと考えています。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター10年に関する資料編

【岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について】

平成9年1月29日　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会承認

1　センターの現状と問題点

（1）調査研究業務の現状と問題

a 発掘調査　本学構内遺跡の調査については、昭和63（1988）年度から平成7（1995）年度までの8年間に12件の発掘調査、16件の試掘調査を実施した。発掘調査の総面積は約1万平方メートルで、年間の平均発掘調査面積は約1250平方メートルであった。センターの前身である岡山大学埋蔵文化財調査室の時期「昭和58（1983）年度～昭和62（1987）年度」を含めると、発掘調査は総計20件、約1万8200平方メートルの面積に達する。この結果、津島岡大遺跡は縄文時代の集落と弥生時代以降の水田開発の歴史の解明に主な意義を有し、鹿田遺跡は弥生時代以降の集落の変遷とりわけ古代・中世の遺跡構造を知るうえで重要性をもつことが判明した。岡山平野という1つの舞台を背景にしながら、互いに異なった性格をもつ二つの遺跡を系統的に調査してきたことにより、岡山平野における原始・古代を中心とする歴史と文化の多様性を明らかにする成果を得つつある。

こうした成果は、それを畿内地域や九州あるいは大陸を含む周辺地域との文化的脈絡の中に位置づけることによって、いっそう幅広い視点から深い意義が見出されるはずであるが、この点については特にセンター専任助手の個別研究の成果も期待される。

b 刊行物　センターでは3種の印刷物を刊行してきた。『発掘調査報告書』は発掘調査の成果をまとめた学術報告で、8年間に7冊を刊行した。『岡山大学構内遺跡調査研究年報』は発掘・室内作業等の経過を年度別にまとめたもので、5号から12号までの8冊を定期刊行した。『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』は構内遺跡の調査成果をテーマ別にとりあげ一般向けに解説したもので、平成7（1995）年度までに15号を刊行した。センター組織になってようやく印刷物の作成が正常化したが、発掘調査報告書についてはなお遅れ気味で、翌年度刊行を目標とすべきであろう。

c 遺物の保管・保存処理・展示　平成7年度までの構内遺跡の発掘調査等で出土した遺物の総量は、2203箱（1箱約30リットル）、点数にして約90万点である。土器・石器が過半を占めるが、津島・鹿田とも木製品および古環境資料の割合が高い。収蔵施設の床面積は333平方メートルである。現在の速さで発掘が進むならば、早晩新たな収蔵施設が必要となろう。木製品の保存処理施設は平成4（1992）年度から稼動させており、恒久保存に効果を発揮している。今後、鉄製品処理施設の導入についても検討すべきであろう。現在のセンター施設はプレハブによる仮設建物であり、調査データや出土遺物保管の保管のためには、自然災害や人為的な危険に対して安全な恒久施設が不可欠である。調査成果の展示公開や新しい分析器機・情報機器等の導入のためにも、スペースの確保が必要となろう。

（2）管理運営の現状と問題

a 管理運営　センターの運営については、学長を委員長とする管理委員会において年間の事業計画と予算を決定し、センター長を委員長とする運営委員会において事業の具体化をはかっている。

センター内においては、月1回の定例センター会議での打ち合わせのほか、センター長・センター室長の随時の指導により、専任助手が主体となって日常業務にあたっている。予算の執行・文書処理等は事務局施設部企画課が行っている。

センターは、ほぼ年間を通じて数十人の作業員が働く発掘調査・室内整理の現業をかかえている。事故の危険も大きいこうした日常業務を執行するセンターに専任の教授ないし助教授のポストがないことは、管理運営上きわめて問題が多い。専任の事務組織の確立も課題であろう。

b 職員の構成と処遇　センター発足時に助手7・技術補佐2・補助員4のポストが確保され、発掘と報告書作成を軸にした業務を行うことが可能となった。しかし助手の在籍は常時4～6人である。これはセンター内では昇任の機会がなく、人材を得にくい事情による。力量のある研究者を育成するためにも、教授・助教授ポストの確保は不可欠である。助手は現在文学部助手となっており、発令・出張欠勤手続き・科学研究費申請等を文学部および文・法・経事務部に依存している。

（3）その他の問題点

a 教育との結びつき　センターは大学にありながら、教育活動とはかかわりをもっていない。人文・自然科学の過去に関する膨大な資料の蓄積と研究の実績を教育に活用するならば、学生が過去の遺産に直接触れることによって新鮮な学問的刺激を受ける機会となるであろうし、センター専任教官が教育に関する経験をつむ機会も与えるであろう。

b 文化財とのかかわり　センターが調査研究の対象としている資料は、学問的には広い意味で考古資料が主体をなしているが、これらは同時に文化財保護法に規定する埋蔵文化財にあたっている。出土した資料は、報告書を作成した後も文化財として恒久的に保存していく義務が課せられている。それだけに安定した組織が、安全な施設で保存管理を行っていくことが重要である。

C 本学内外への公開　文化財は国民共有の財産であり、大学内はもちろん、大学外の市民にも広く公開する努力が要請されている。センターでは、これまでに発掘調査ごとに調査成果の現地説明会を開催しており、センター施設内と事務局会議室においてささやかながら常設展示を行い、津島・鹿田地区で計3回の特別展示会を開催してきた。しかし所蔵資料の質と量から見れば、公開のための施設・人員・予算ははなはだ不十分である。埋蔵文化財の公開活用は、開かれた大学を実現していく上できわめて重要な意義をもつであろう。

（4）センターの現状の問題点と今後の方向

これまで述べてきた現状の問題点を整理すれば次のようになる。

①発掘調査の成果を、周辺地域との関連でより幅広い視点から意義づけていくことも必要である。

②発掘調査報告のできるだけ早い刊行を目指す必要がある。

③センター施設は仮設建物であり、文化財の恒久的な保存にふさわしい施設がない。

④専任の教授・助教授ポストがなく、現業をかかえる機関の管理運営体制として問題が大きい。

⑤管理職・専任助手・事務がすべて別機関の所属で、機関の一体性・独立性にかける。

⑥内部では助手の昇任の機会がなく、人材の育成・確保に支障がある。

⑦センターが蓄積してきた資料と研究実績を教育に生かす機会がない。

⑧センターの調査研究資料は同時に文化財であり、調査成果や出土資料を文化財にふさわしい扱いで保存管理し、大学内外へ公開していく必要がある。

センターは、前身の調査室時代に比べると人員・予算・施設のいずれの面でも改善された面をもち、それにふさわしい事業の推進を行ってきた。しかしこの8年間を振り返り、10周年以降における新たな事業の推進を期するとき、上記の問題点について抜本的な解決を図ることが望ましい。センターは学則設置であるという性格上、文部省に対する概算要求を行う根拠をもたず、その意味では組織的・財政的な固有の基盤を欠いている。したがって職員構成・予算・施設等に関する諸問題の根本的な解決には、センターの省令設置化を基本において考えるべきである。

2　センターの将来構想

（1）今後の施設整備計画と発掘調査

a 施設整備計画　施設設定委員会によって決定されている第1ステージ（今後5年間）の津島団地計画施設は計22施設で、その建坪総計は1万6520平方メートルである（図1）。鹿田団地の長期

計画については現在検討を継続しているところであるが、いずれ相当数の計画施設が確定されるものと予想される。

b 遺跡の現状　昭和58（1983）年以来の本学構内における発掘調査・試掘調査の結果等によれば、津島・鹿田の両キャンパスとも、ほぼ全域が遺跡である可能性が高い。遺跡の密度を推定してみると、津島岡大遺跡はキャンパス北東角の馬場周辺と事務局を結んだ北東－南西ラインがもっとも高密度で、文化層（遺構・遺物を含む時代ごとの地層）の重複も多い。このラインより南東側は普通程度、北東側は希薄な密度となる（図２）。

鹿田遺跡の場合は、津島岡大遺跡に比較すれば文化層の重複はやや少ないが、集落遺跡であるという性格上、各文化層の遺構・遺物の密度が極めて高い。キャンパスの90パーセントほどが高密度になると予想される（図3、なおキャンパス北端の希薄部分は埋没旧河道）。

c 今後の発掘調査計画　以上の施設整備計画と遺跡の現状を踏まえて今後必要となる発掘調査を試算してみると、津島キャンパスについては今後5年間の発掘予定総面積が1万7000平方メートル、年平均発掘予定面積が3400平方メートルとなる（表1）。これらの発掘を実施するためには、調査員が常時5人ないし6人在籍している必要がある。この年平均発掘面積はこれまでの実績の約2.5倍であり、整理・報告書作成作業に必要な人員を考慮すれば、少なくとも調査員10人前後の体制が必要となろう。

これに更に鹿田キャンパスの発掘調査が加わるとすれば、第1ステージの施設整備計画の実現のためには、現在のセンターの規模を2倍ないしそれ以上に拡大することが必要となろう。

しかし実際には、施設予算の規模によって、必要な発掘調査面積は左右される。少なくとも従来程度の速度で施設整備が進むとすれば、現在のセンターの規模は維持しなければならない。

（２）センターの将来構想と岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム

a センターの省令設置化　センターの発掘調査を中心とした事業を今後とも円滑に推進し、先にあげた現状の諸問題を解決していくためには、センターを省令設置による共同利用施設に改変していく必要がある。埋蔵文化財調査研究センターという独立機関として省令化を進めることが一つの方向であろう。しかし、本学全体のより幅広い研究・教育の実績を踏まえ、関係諸学部・諸機関との密接な連携をはかって名実ともに共同利用施設として機能しうる機関を構想するなかで、センターの位置づけを考えていくことも重要な方向であろう。

b 文部省のユニバーシティ・ミュージアム整備事業　平成8（1996）年1月、学術審議会学術資料部会は『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』を文部大臣に答申した。ユニバーシティ・ミュージアムは、学術研究の目的で収集あるいは生成した学術標本の　①収集・整理・保存、②データベース化による情報提供、③公開と展示、④研究・教育への活用（博物館学芸員養成課程の充実を含む）　を促進することを目的としたもので、その実現のために　①独立性のある学内共同利用施設の設置、②専任研究者の配置、③収蔵・展示・研究施設の整備　をはかることが必要としている。文部省は答申にもとづいて平成8（1996）年度からこの事業を実施し、東京大学総合研究博物館がまず誕生し、平成9年度以降についても順次施設を設置していく方針とされる。

c 本学におけるユニバーシティ・ミュージアムの可能性　本学平成9年度概算要求には「岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム」の項目が掲げられた。平成8年12月に全学教官を対象として実施された「学術標本に関するアンケート」には、文学部・教育学部・理学部・医学部・工学部・農学部の6学部、保健管理センター・資源生物研究所・埋蔵文化財調査研究センターの3施設から関係資料保有の可能性がある回答が寄せられた。資料の内容についてはさらに詳しく検討する必要はあるが、単純集計での資料総数は330件・約138万点にのぼる。本学における学術標本の質的な多様性と量的な豊かさを物語るものであり、本学におけるユニバーシティ・ミュージアム設置の基礎的な条件は十分ととのっているものと思われ、またその実現の必要性が高いと考えられる。

d 岡山大学ユニバーシティ・ミュージアムの構想とセンター事業　岡山大学ユニバーシティ・ミュージアムの全体の構想については、今後関係学部・機関等の間で協議していくべき課題であろうが、センターとしては従来からの事業の継続と今後の充実・発展を期して、少なくとも次のような内容が含まれることを希望したい。

①本学構内における発掘調査・出土遺物整理・報告書刊行等の事業を継続し、現在以上の規模の

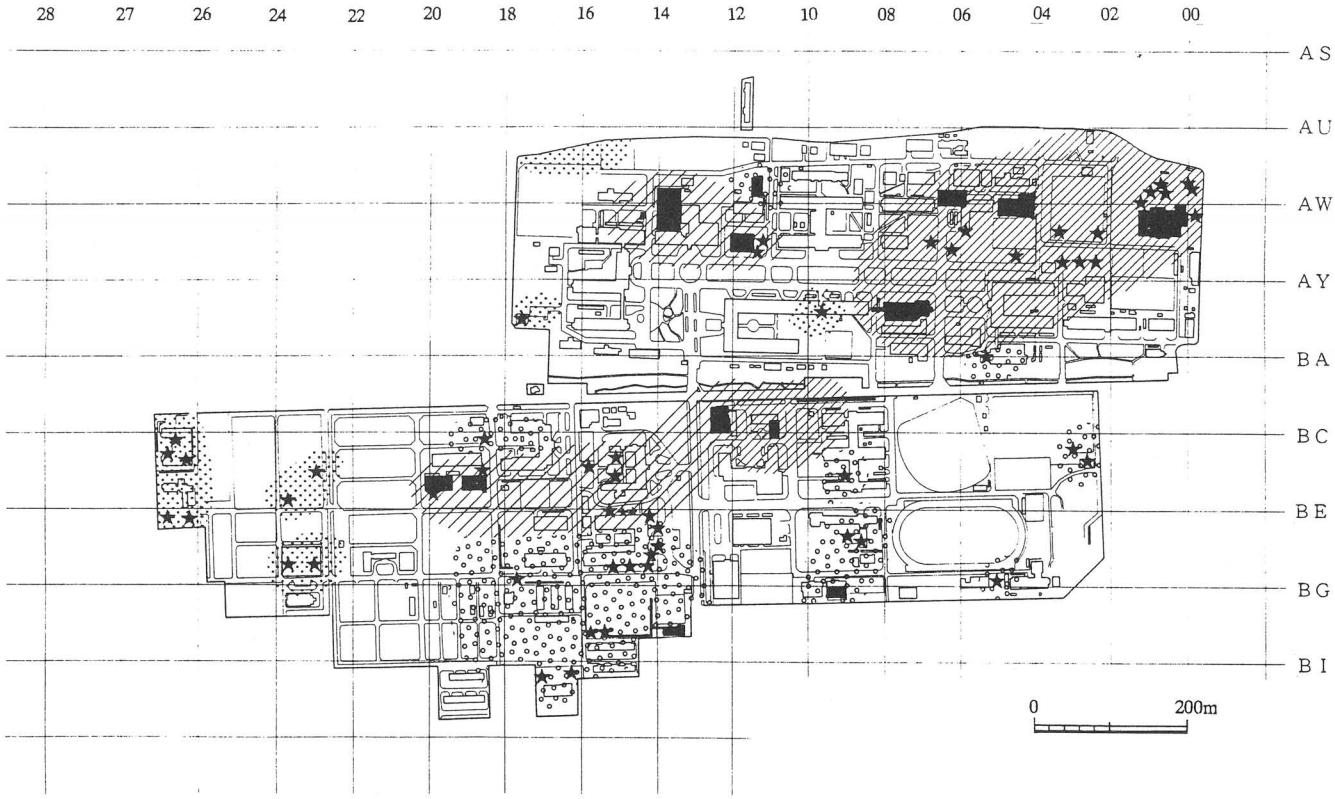


図２　津島地区（縮尺 1/12000）

図３　鹿田地区（縮尺 1/5000）

＊　図１と表１は省略

発掘調査にも対応できる体制をつくること。
②専任の教授ないし助教授の配置によって管理運営体制を確立し、助手・事務職の同一機関への帰属をはかること。
③発掘調査資料（図面・写真等）と出土文化財を保存・整理・公開しうる恒久建物を新設すること。

(3) 省令化実現までの経過措置

岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム等によるセンターの省令施設への改編の実現までには一定の期間を要すると思われるので、省令化が実現するまでの期間、次のような経過措置をとることが必要である。
①センターの省令施設への改編を実現するため、文部省への概算要求を毎年継続して行う。概算要求の内容については、ユニバーシティ・ミュージアム等として関係諸学部・機関と連携して行う方向を基本とし、連携のための協議の進展の度合いにあわせ、センター単独の機関として概算要求を行う場合もありうる。
②平成9（1997）年11月以降、省令施設への改編が実現するまで、現在の学則設置による岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを存続させる。省令化が実現しない場合は、10年後にセンターのあり方を再度見直す。

【岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告】

平成8年10月4日・平成8年11月12日

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの理念・目的に関する点検・評価

[現状の説明]

埋蔵文化財は、地中に埋もれた住居跡や貝塚などの遺構・遺跡と土器・石器などの遺物からなり、文献史料とならんで過去の歴史を物語る資料として重要な意義をもつ。文化財保護法は、文化財をわが国の歴史・文化等の正しい理解のために欠くことのできないものであり、貴重な国民的財産として保護する必要を述べている。しかし、これらの文化財は都市開発や産業の発展のもとでともすれば忘れられ、破壊の危機に陥る場合も少なくない。とりわけ埋蔵文化財については、近年の大規模な土木工事が増加する状況のもとで、その系統的な調査研究と保護対策の必要が強調されてきた。遺跡に埋もれた文化財の調査成果の一端は佐賀県吉野ケ里遺跡や青森県三内丸山遺跡の例に示されており、豊かな内容を持ったわが国の歴史を復元するためには、今後さらに埋蔵文化財の調査研究の重要性が増すものと思われる。

岡山県南部には、原始・古代の遺跡がきわめて多い。備讃瀬戸地域のサヌカイトを用いた旧石器文化、彦崎貝塚・津雲貝塚等の縄文時代遺跡、造山古墳・作山古墳をはじめとする古代吉備勢力の面影をとどめた遺跡など、その内容も変化にとんでいる。とりわけ旭川の沖積作用で肥沃な土地が形成された岡山平野は、水稲農耕の開始と発展の先進地域の一つとみなされている。たとえば1968年に岡山県総合グラウンド内の武道館建設予定地で発掘の行われた津島遺跡では、弥生時代初頭の水田遺構の実体がはじめて明らかにされ、きわめて重要な遺跡として国史跡に指定されている。また近年発掘された津島江道遺跡（岡北中学校）においては、畦畔をもつ水田遺構が従来縄文時代晩期に属するとされていた土器とともに発見され、それまで弥生時代前期に始まると考えられてきた水稲農耕がさらに古くさかのぼることを明らかにした。

岡山大学はこうした原始・古代遺跡の集中地域にあり、施設建設等に際しては事前の試掘調査等により遺跡の保護に努めてきたところであるが、1982年、津島キャンパスにおいて多量の遺物を含む弥生時代遺跡を確認し、本格的な発掘調査を行った。これが津島岡大遺跡の最初の本格的な発掘であった。つづいて1983年には鹿田キャンパス附属病院外来診療棟建設地で2,000平方メートル

をこえる発掘があり、以後、両キャンパスにおいては系統的に調査が進められることとなった。

津島岡大遺跡の最初の発掘は文学部考古学研究室が主体となって実施したが、日常の研究教育に支障が生じ、長期にわたる調査は不可能となった。キャンパスでのあいつぐ遺跡の発見と発掘に対応するため、1983年、本学では施設設定委員会のもとに岡山大学埋蔵文化財調査室を設置し、専任の助手１名を配置した。さらに1987年には学則により岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設立し、助手６名をもって本学構内における埋蔵文化財の調査・研究・保護に万全を期すこととなった。

本学にかかわる以上の歴史環境と本センター設立の経緯がものがたるように、本センターは、岡山平野及び広く西日本における関連遺跡を念頭におきつつ、本学構内の遺跡・遺物の調査研究を通じて原始から現在に至るまでの歴史展開の究明に寄与するとともに、調査研究を本学内外に公表し、あわせて遺跡・遺物の保護をはかることを目的としている。

［点検・評価］

津島岡大遺跡は縄文時代・弥生時代・古代の遺跡を主とし、鹿田遺跡は古代から中世にかけて栄えた遺跡である。また津島岡大遺跡の弥生時代以後の遺構が水田を主としているのに対し、鹿田遺跡は集落遺構が中心をなしている。本学構内でのこれまでの発掘で明らかとなった多くの時代にわたる遺構、多彩な生活内容を示す痕跡は、本センターが目的とする系統的な歴史展開の究明が適切であったことを裏付けている。

本センターは、発掘調査報告書・年報・センター報などの刊行を通じて調査成果をくわしく公表してきたが、発掘調査現場ごとの現地説明会や数年おきに開催している発掘調査成果の展示会には多数の一般市民の参加もあり、成果の公表・公開が今後とも強く望まれている。

本センターは、本学構内での建設工事等の計画がある場合には、立合い調査・試掘調査等により地下遺構への影響をできるだけ少なくするように努め、大規模な工事の場合は発掘調査を実施してきた。遺跡・遺物保護の目的は、文化財保護法の精神を本学において具体化するものであり、学術研究を支える諸施設の建設の推進とともに、いっそう発展させるべき理念であろう。

［長所と問題点］

本センターの理念・目的の最大の特徴は、多面的な内容を持つ遺跡の発掘を基礎にして当地域の歴史の解明に寄与すると同時に、かけがえのない文化遺産の価値を広く知らせ、その保護をはかるという、学術研究機能と社会的機能の両面を掲げるところにあるといえよう。しかし現状においては、こうした優れた特色や実績を教育活動に活かしていく道がまだ準備されていない。大学の共同利用施設として、教育活動と人材養成にかかわる理念・目的を明確にしていく必要が痛感される。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

本センターの将来あるべき理念としては、①遺跡・遺物にもとづく地域史の研究　②文化財の調査と保護　③調査成果と文化財の保管・公開・活用　④調査成果と文化財の教育への活用及び人材育成、という４点をあげることができよう。こうした理念を実現するためには、たとえば調査・研究・教育・人材育成については専任の教授・助教授を含む人員配置が必要であり、また文化財の保管・公開・活用については恒久的な研究・収蔵・展示施設が不可欠となろう。しかし現在の岡山大学学則の設置による施設ではこうした条件を満たすことが極めて困難であり、本センターのあるべき理念を達成するには省令設置による大学博物館等として再編整備していくことが要請される。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動に関する点検・評価

ａ．検証システムの適切性

［現状の説明］

センターの研究活動については、発掘調査・出土遺物の整理等に関する作業経過を年１～３回程度当センター管理委員会および運営委員会に報告し、その進捗状況と成果の点検を行っている。センター内においては、月１回のセンター会議で、より詳細な報告と検討を実施している。また、各年度の調査研究成果を翌年度に岡山大学構内遺跡調査研究年報として印刷し、学内各部局と他大学・地方公共団体の発掘調査関係機関等に公表している。

［点検・評価］

管理委員会・運営委員会では全学的な立場からの適切な評価があり、センター内の定例会議による恒常的点検も有効に機能している。さらに、年報による１年間の活動内容の総括や岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報による成果の速報等は、センターの調査・研究活動の自己評価と外部からの評価を進めるための条件を整えるという面で、積極的な意義を有するといえよう。

［長所と問題点］

管理委員会・運営委員会による点検評価は、主要な業務である構内遺跡の発掘調査や出土遺物整理の作業等の進行に効果を発揮している。反面、調査研究の内容あるいは質的側面に関する点検・評価については、運営委員による発掘調査現場の視察等を随時行っているとはいえ、必ずしも十分とはいえない面を残している。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

センターにおける調査研究の成果を質的側面から検証するためには、学内の考古学・歴史学および自然科学諸分野等を含む学内関連部局との日常的な連携を基礎に、それらの研究者の集団的な討議による成果の検証システムを考えていく必要があろう。

ｂ．活性化状況

［現状の説明］

センターの研究活動は、構内遺跡の発掘調査・出土遺物整理・報告書刊行等を主体とする総合研究と、総合研究を充実・発展させるのに必要なセンター専任職員の基礎研究からなっている。総合研究については、センター発足後の1988年度から1995年度までに計12件（10,001㎡、年平均1,250㎡）を実施し、調査報告書を7冊、年報を8冊、センター報15冊を刊行してきた。基礎研究では、1990年度から1995年度までの間に計39本の論文・報告等の公表があったほか、計６件の文部省科学研究費補助金が交付されている。

［点検・評価］

総合研究に関しては、発掘調査から報告書作成にいたる期間を確保できる状況にあることから、着実な成果をあげてきたといえる。その結果、調査対象としている津島岡大遺跡と鹿田遺跡が岡山平野の歴史を解明するには欠かせない重要な遺跡であることが明らかになり、全国的にも注目を集めている。一方、基礎研究については、発掘調査に直接かかわる遺構・遺物のテーマの場合は、比較的研究を進めやすい。しかし、例えば山地・海浜地域の生産遺跡と平野部の集落遺跡との関係の追究といったより幅広い分野を含む研究、生産・流通・集落・祭祀と政治・国家体制との関係の追究といったより高い見地からの研究の推進については、なお今後の課題といえよう。

［長所と問題点］

センターが総合研究において調査対象としている津島岡大遺跡と鹿田遺跡は、それぞれが特有の歴史的個性を示す。津島岡大遺跡は縄文時代の集落と弥生時代以降の水田開発の歴史の解明に主な意義を有し、鹿田遺跡は弥生時代以降の集落の変遷、とりわけ古代・中世の遺跡構造を知るうえで重要性をもつ。そうした遺跡を長期間にわたって継続的に調査・研究することは、岡山平野という一つの舞台を背景に展開される歴史をより具体的に解明するという意味で、非常に有効な方法といえる。問題点としては、総合研究の推進において学内の他の部局・研究者との連携による成果が、例えば石器石材の研究や出土植物種子の研究など個別的なケースにとどまっていること、発掘調査の成果を畿内・九州・大陸等のより広い地域、旧石器時代から歴史時代までのより幅広い時代の研究成果とも関連づけて、その歴史的意義を把握していく方向がなお十分に明確にされていないことがあげられる。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

学内研究者との連携を推進するため、センターに設置されている調査研究専門委員を拡充し、全学的かつ多角的な共同研究体制を整備していくことが重要である。また資料のデータベース化をはかって関係機関との情報交換を推進し、よりグローバルな視点から発掘成果を比較検討する必要がある。基礎研究についても、少なくとも科学研究費等の裏付けのある課題に関しては研究条件を整えていかなければならない。

c．活性化促進の条件整備状況とその有効性

［現状の説明］

総合研究にかかわる経費は文部省および学内予算によっている。研究と資料保管のための施設が建設されており、研究資料の整理に必要な補佐員・補助員も確保されている。専任職員の研究費・出張旅費等はほぼ学内の平均水準にある。科学研究費については、法・文・経済学部事務部を通じて申請を行っている。内地留学・海外留学・長期の海外研修の実績はない。

［点検・評価］

本センターが省令設置でないという条件のもとでは、現在の研究経費や施設のあり方は、本学各部局からの相応の協力・支援の結果として十分に評価されるが、国立大学の附属施設として本来あるべき状態を想定するならば、現在のプレハブ建物では、出土遺物・研究資料の恒久的かつ安全な保管に重大な危惧があり、建物規模も今後の資料増加を考えれば十分なものとはいい難い。文化財の自然科学的手法による研究が進展する中で、分析機器や施設の整備も今後に残された大きな課題であろう。

［長所と問題点］

学則設置の機関として独立の施設が確保されていることは、現在までの研究実績を支えてきた研究条件面での基礎として、重要な意義をもっている。しかし本センターが国民共有の財産である文化財を研究対象としているという特殊な性格を考慮すれば、研究と資料保管のための施設・機器の整備は急務といえる。また、職員の長期の留学・研修等が実質的に困難となっている実状は、長期的な人材育成という観点から改善を検討していく必要があろう。外部からの留学・研修の受け入れについても、検討課題となろう。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

研究の内容にふさわしい恒久的な建物建設と人材育成をおこなうには、本センターの省令設置施設としての再編を検討するなかで、建物の資格面積を確保しあるいは研究条件の改善をはかっていくことが不可欠であろう。

再編の具体的な方向としては、1996年1月に学術審議会学術資料部会が報告したユニバーシテイミュージアムを検討していくことが重要である。この博物館は文化財に限らず広く大学での研究にかかわる学術標本を収集・整理・保存・活用していくための機関であり、専任職員の配置と施設建設の必要がうたわれている。共同利用施設として本学にユニバーシテイミュージアムを設立するならば、文化財を含む学術資料の恒久的な保存がはかられるとともに、学術資料を基礎として本学内外の学際研究の活性化にも貢献するであろう。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営に関する点検・評価

［現状の説明］

本センターの管理運営については、岡山大学学則により、学長を委員長とする管理委員会とセンター長を委員長とする運営委員会が基本的な方針を決定している。それをもとにセンター長を中心とするセンター会議において業務のより具体的な実施計画をたて、進行状況を点検している。センター内での日常的な業務の統括は専任助手が持ち回りで担当する。センター長・センター室長・運営委員会委員の一部は学長による任命である。センターの業務のうち、事務処理は施設部企画課があたっている。職員のうち、助手は文学部に所属し補佐員・補助員は企画課に属している。

［点検・評価］

管理委員会・運営委員会は、年に1～3回程度開催される。各部局長等によって構成される管理委員会では全学的意見が反映され、全学共同利用施設としての点検が行われている。少人数の運営委員会では一歩踏み込んだ率直な討議が行われ、実質的運営に有効性を発揮している。センター内では定例センター会議を月1回開いており、職員全体の討議によって業務の進行状況や問題点などを明らかにし、相互の意志疎通をはかっている。

［長所と問題点］

本学構内遺跡の調査方式としては、これまで文学部考古学研究室が本務外の仕事として行った調

査、施設設定委員会のもとにおかれた岡山大学埋蔵文化財調査室が行った調査があったが、それらに比較すれば、現在のセンターは年間予算を年度当初にたて一定数の助手ポストを確保しうる等、より改善された条件にあるといえる。現在の管理運営は、全学の意志をもっともよく生かすことのできる形態である。しかしながら他方では、学問研究の進歩には当該組織および職員の自発的・内在的な意欲の発揮が不可欠であることはいうまでもない。センターは学則設置機関であるという制約上、文部省に対して概算要求を行う根拠がなく、その意味では財政的・組織的な固有の基盤が欠いているともいえよう。センターの組織と職員個々の自主性をいっそう発揮させるためには、自立した組織としての制度を確立していく方向が考慮されなければならない。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

センターを省令設置のユニバーシテイミュージアムとして再編していくならば、教授・助教授ポストを配置し、専任職員による日常業務の管理・指導体制が確立するほか、助手・補佐員等の職員が他部局の所属であるという不正常な事態は解消し、調査研究事業と事務業務との一体的な管理運営が実現するであろう。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価

a．自己点検・評価の恒常的システムとその活動の有効性

［現状の説明］

センターでは1993年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会を設置した。自己評価委員会は、現在センター長・センター室長・センター助手２名・センター運営委員６名・施設部長の計１１名で構成している。

［点検・評価］

自己評価委員会の開催は1996年10月から始まった。それまでセンター内で点検評価のための基礎資料を作成してきた。一定の準備作業を進めてきたとはいえるが、委員会自体の本格的な活動が遅れたことは重大な反省点である。

［長所と問題点］

自己評価委員はセンターの職員あるいは運営委員としてセンターの理念・目的をふまえ、日常の業務にも多少なりとも接する機会を有するメンバーであり、率直な意見交換により具体的かつ将来展望をふまえた点検・評価が可能であろう。

将来の改善・改革へ向けた方策

本センター自己評価委員会規定は、上記委員の他に必要な者を加えることができる余地を残している。構内遺跡あるいは広く文化財に関心をもつ本学教官を加え、日常的な運営から一歩離れた立場からの意見を得ることも有効であろう。

b．自己点検・評価を基礎に将来の発展に向けた改善・改革を行うためのシステムに関する点検・評価

［現状の説明］

センターにおいては、自己点検・評価の結果を将来の改善・改革へ結びつけるための独自の組織を設置していない。今回の評価・点検については、その結果を十分ふまえ、さしあたり運営委員会・管理委員会において今後の方策を検討していくことになろう。

［点検・評価］

具体的な作業が進んでいないため、現状の点検・評価を行うことは今後の課題である。

［長所と問題点］

本センターは1987年に設置されたが、設置を承認した同年11月25日の評議会では、設置期間について「時限を10年とし、在り方の見直しを行うこととしたい」と決定している。このことに関し、1996年５月の管理委員会では、運営委員会で今後の在り方を検討し、結果を本年度内に管理委員

会に報告することとなった。本センターはいずれにしても将来の在り方を抜本的に見直す必要に迫られており、自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくシステムづくりは、それだけ重要な意義をもつことになる。

［将来の改善・改革へ向けた方策］

自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくシステムのありかたについては、今後自己評価委員会・運営委員会・管理委員会等において改善・改革をもっとも実現しやすい機動的で強力な組織を検討していくべきであろう。

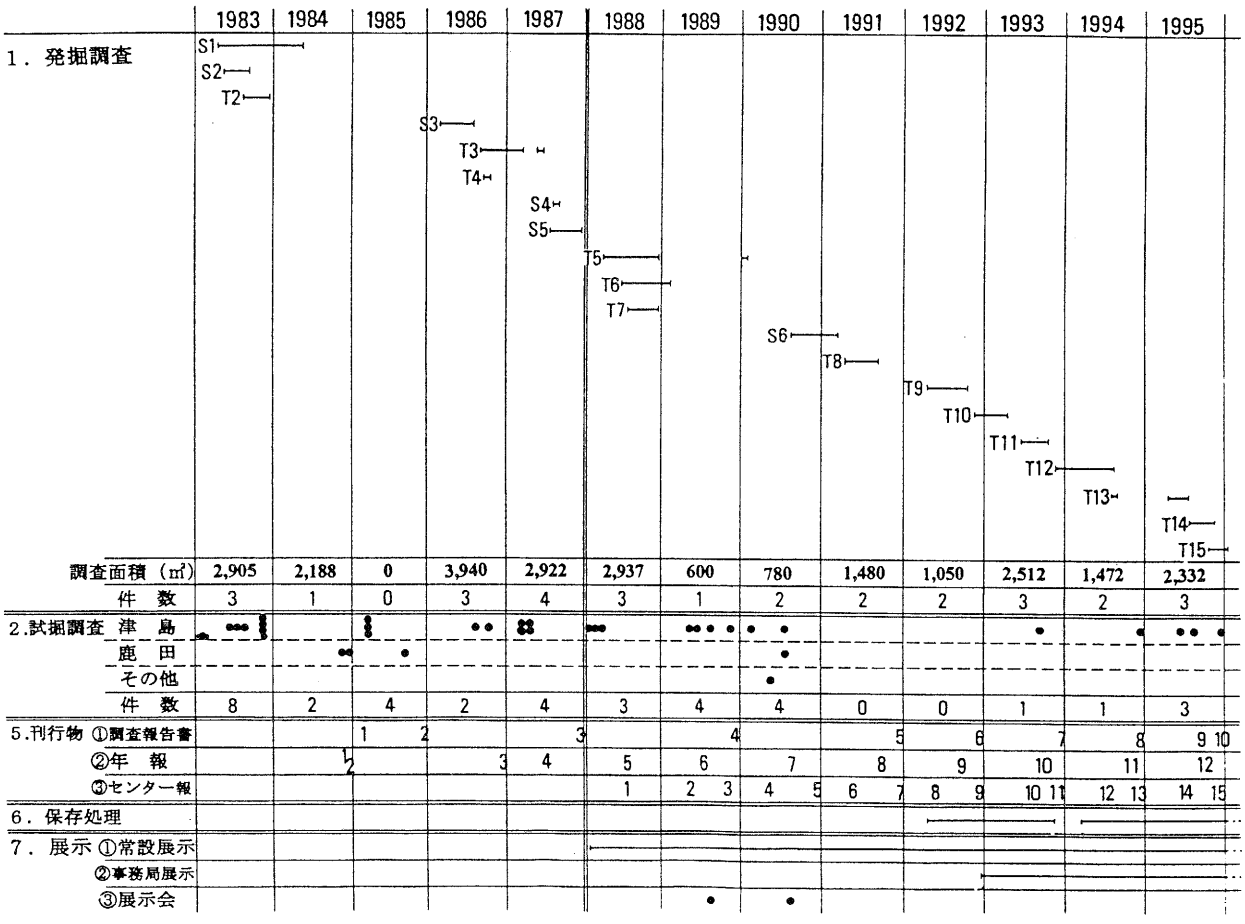
岡山大学構内遺跡調査研究業務に関る資料

埋蔵文化財調査研究センター業務状況（1983年度～1995年度）

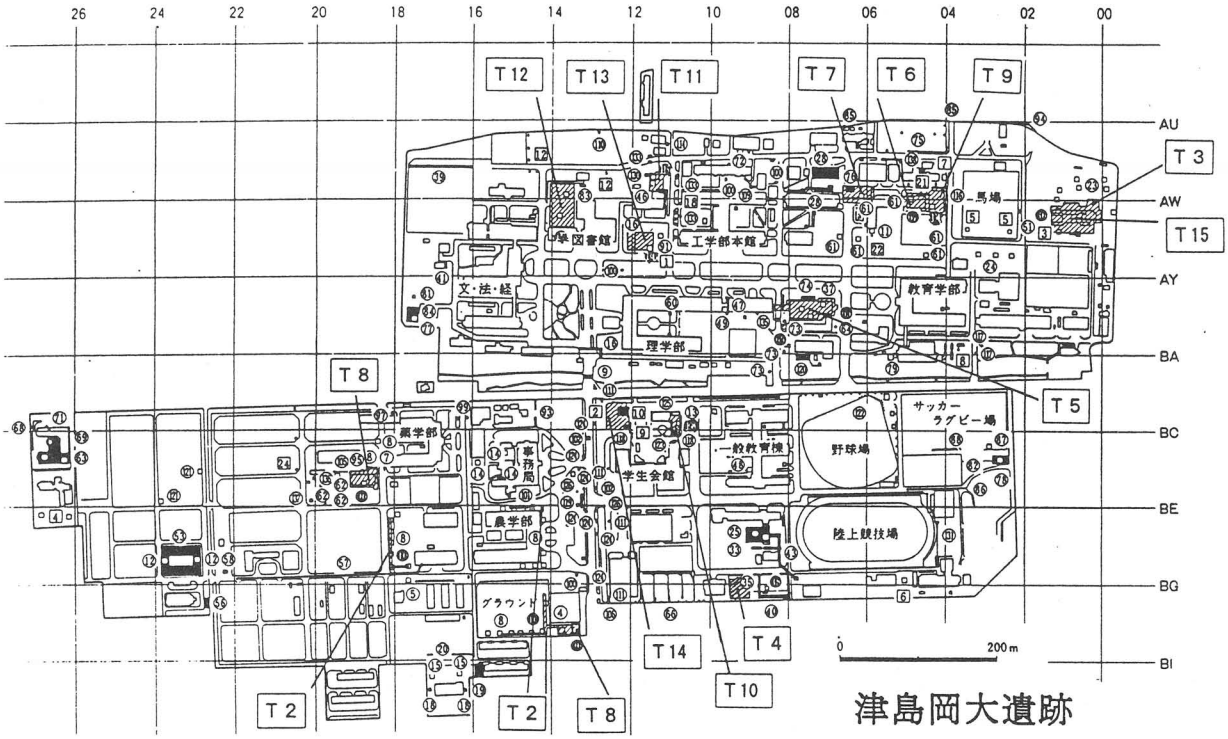
1．発掘調査：20件…総面積18218㎡
（平均1401.4㎡／１年）
2．試掘調査：36件（平均2.6件／１年）
3．立会調査：年間20～45件
4．分布調査：４回（３地区）
内訳　1986年度　半田山山塊
（※1989年度　半田山城の平板測量）
1987年度　本島
1989年度　本島
1989年度　三朝地区
5．刊行物：①発掘調査報告書　10冊
②構内遺跡調査研究年報　12冊
③センター報　15冊
6．保存処理：木製品のＰＥＧ含浸処理…２工程
（１工程期間1.5年～２年）
炉の復元処理など…２回
7．展示：①　常設展示
1988年度から公開
②　事務局会議室展示
1992年度から公開
③　特別展示会…２回開催
・1989年度津島地区
・1990年度鹿田地区

業　務	内　容			
		83～95年度	83～87年度	88～95年度
1．発掘	調査件数	２０件	８件	１２件
	調査総面積	18218㎡	8217㎡	10001㎡
	年平均面積	1401.4㎡	1643.4㎡	1250.2㎡
2．試掘	調査件数	３６件	２０件	１６件
	年平均	2.6件	４件	２件
3．立会	２０～４５件／年			
4．分布調査	実施回数	４回	２回	２回
	半田山	１回	86年度	
	本島	２回	87年度	89年度
	三朝	１回		89年度
5．刊行物	①報告書	１０冊	３冊	７冊
	年平均	0.8冊	0.6冊	0.9冊
	②年報	１２冊	４冊	８冊
	年平均	0.9冊	0.8冊	１冊
	③ｾﾝﾀｰ報	１５冊	０冊	１５冊
	年平均		０冊	1.9冊
6．保存処理	ＰＥＧ処理	２工程	０	２工程
	炉の復元			２回
7．展示	常設展示	２箇所	無	センター
			無	事務局
	特別展示	２回	０回	２回

＊　S：鹿田遺跡，　T：津島岡大遺跡



岡山大学構内遺跡調査地点図



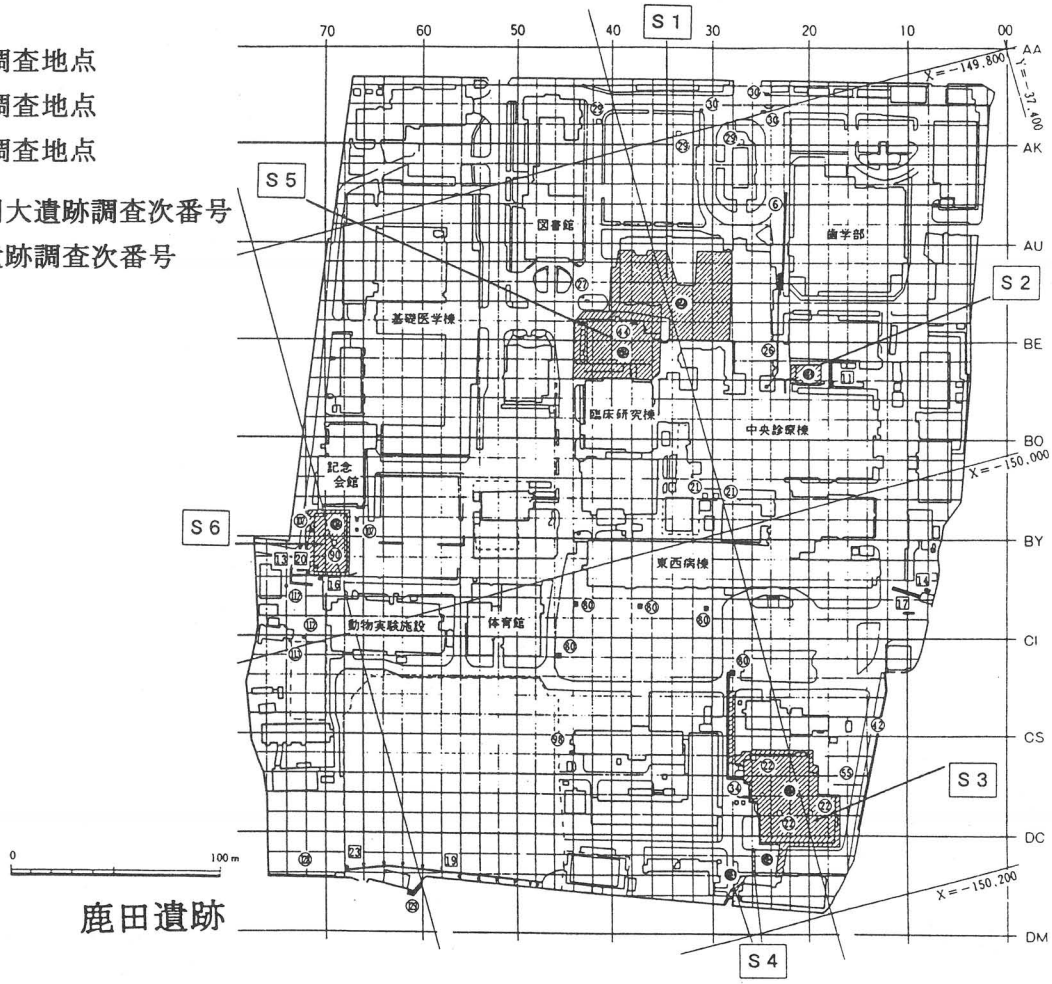
発掘調査地点

試掘調査地点

立会調査地点

T：津島岡大遺跡調査次番号

S：鹿田遺跡調査次番号



発掘調査一覧

1983年度～1995年度
調査件数：20件，調査総面積：18218㎡，年間平均調査面積：1401.4㎡

＜1983年度～1987年度＞埋蔵文化財調査室の発掘調査
調査件数：８件，調査総面積：8,217㎡，年間平均調査面積：1,643.4㎡

番号	調 査 名（事業名）	期　　間	面積(㎡)	備　　考	文献番号
1 S１	鹿田１次調査 （外来診療棟新営）	1983.7.27～1984.8.31	2,188	弥生時代中期後半～中・近世 住居・建物・井戸・溝・土坑・ピット群等多数	発掘３
2 S２	鹿田２次調査 （NMR-CT室新営）	1983.8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世 住居・井戸・溝・土坑・ピット群等多数	〃
3 T２	津島岡大２次調査 （農.排水管埋設） （農.合併処理層）	1983.11～1984.3 1984.1.9～3.5 1983.11.14～11.22 1984.1.9～3.5	541 265 276	縄文時代晩期～弥生時代前期 溝・水田・柱穴列	発掘２
4 S３	鹿田３次調査 （医短.校舎）	1986.6.2～11.29	2,390	古代・中世 溝・土坑・ピット群	発掘４
5 T３	津島岡大３次調査 （男子学生寮）	1986.12.1～1987.6.18 1987.8.24～9.5	1,550 80	弥生～近代の水田址・大溝 縄文後期～弥生時代早期の河道・貯蔵穴	発掘５
6 T４	津島岡大４次調査 （屋内運動場）	1987.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝，中世河道	年報４
7 S４	鹿田４次調査 （医短.配管）	1987.11.2～21	30	古代の河道・橋脚遺構	発掘４
8 S５	鹿田５次調査 （管理棟）	1987.10.6～1988.3.31	1,192	弥生～近世 井戸・溝・土坑（墓）・土器溜まり・ピット群	発掘６

＜1988年度～1995年度＞ 埋蔵文化財調査研究センタ ーの発掘調査
調査件数：12件，調査総面積：10,001㎡，年間平均調査面積：1,250.2㎡

番号	調 査 名（事業名）	期　　間	面積(㎡)	備　　考	文献番号
9 T５	津島岡大５次調査 （自然科学研究科）	1988.6.27～1989.3.19 1990.4.3～ 4.21	1,537 90	縄文後・晩期の貯蔵穴・河道 弥生～近世の水田，古墳時代後期の溝	発掘７
10 T６	津島岡大６次調査 （工.生物応用）	1988.9.20～1989.5.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴・河道 弥生～近世の溝・水田	発掘９
11 T７	津島岡大７次調査 （工.情報工学）	1988.10.12～1989.3.3	800	縄文後・晩期の炉・ピット群 弥生～近世の水田	〃
12 S６	鹿田６次調査 （ｱｲｿﾄｰﾌﾟｾﾝﾀｰ）	1990.11.20 ～1991.6.30	690	中世の溝・井戸・建物群 弥生～古墳時代の溝・土壙	年報８ 年報９
13 T８	津島岡大８次調査 （農.遺伝子） （同 合併処理槽）	1991.7.23～12.25 1991.7.23～12.25 1991.7.23～12.2	790 650 140	弥生時代～近世の溝・ピット群 縄文時代の土壙 古代～近世水田	発掘８
14 T９	津島岡大９次調査 （工.生体機能）	1992.7.1～1993.1.29	650	縄文後・晩期の貯蔵穴・河道ほか 弥生～近世の溝・水田	年報10
15 T10	津島岡大10次調査 （保健管理ｾﾝﾀｰ）	1993.2.1～ 7.31	400	弥生～古墳時代の井戸・土坑・住居 近世の耕地・野壺	〃 年報11
16 T11	津島岡大11次調査 （情報処理ｾﾝﾀｰ）	1993.9.14～1994.1.11	640	弥生時代の水田 縄文時代後期のピット群・炉	発掘10
17 T12	津島岡大12次調査 （図書館）	1994. 2. 9～11.25	1,472	弥生～近世の水田関連遺構 弥生時代後期の大溝 縄文時代後期の焼土遺構	年報12
18 T13	津島岡大13次調査 （福利北）	1995.7.10～10. 4	816	弥生時代の水田，弥生～古墳時代の溝 縄文時代後期のピット群	発掘11 96印刷
19 T14	津島岡大14次調査 （福利南）	1995.10.16 ～1996.2.14	856	弥生時代の水田 弥生～古墳時代の溝・土坑	発掘12 印刷中
20 T15	津島岡大15次調査 （SVBL）	1996.1.16～ 4.25	660	弥生時代の水田・溝 弥生時代早期の貯蔵穴 縄文時代後期の貯蔵穴・竪穴住居・炉 ・ピット・土坑・サヌカイト集積土坑	年報14 印刷中

＊　Ｓ：鹿田遺跡，　Ｔ：津島岡大遺跡
文献番号　発掘：岡山大学構内遺跡発掘調査報告
年報：岡山大学構内遺跡発掘調査研究年報

試掘調査一覧

＜1983年度～1987年度＞埋蔵文化財調査室

番号	事業名	調査開始日	概要	文献
1	農．合併処理槽	1983.09.17	弥生・前期土器片〈1983年度発掘〉	年報1
2	農．排水管埋設	11.05	弥生・前期土器片〈1983年度発掘〉	〃
3	農．排水管中間ポンプ槽	10.22		〃
4	農．畜舎	1984.02.06	土器片出土〈1987年度工事立会〉	〃
5	事．大学事務局	02.06	土器片出土	〃
6	保．保健管理ｾﾝﾀｰ	02.06	溝検出〈1993年発掘〉	〃
7	事．津島宿舎	02.28	土器片出土〈1987年度工事立会〉	〃
8	工．校舎	03	土器片出土〈1988年度発掘〉	〃
9	医病．受水槽	1985.02.15	中世土器・包含層確認〈盛土保存〉	年報2
10	医短．校舎	03.	中世・古代の遺物出土〈1986年度発掘〉	〃
11	教養．講義棟	06.05	遺構・遺物未確認〈1986年度工事立会〉	年報3
12	教育．研究棟	06.04	縄文～弥生時代土器出土	〃
13	学．男子学生寮	06.03	縄文～中世の遺構・遺物〈1986年度発掘〉	〃
14	医病．環境整備	12.23	弥生～中世の遺物	〃
15	学．屋内運動場	1986.11.25	弥生前期溝・中世河道検出〈1986年度発掘〉	年報4
16	自然科学研究科棟	1987.01.13	縄文中期末～後期の遺構・遺物〈1988年度発掘〉	〃
17	事．外国人宿舎	06.29	近世・弥生・縄文の遺構面確認	年報5
18	情報処理センター	06.29	黒色土を標高2.2m前後で確認〈1993年度発掘〉	〃
19	理．エレベーター	07.13	中世・古代の水田址〈継続して発掘〉	〃
20	教養．エレベーター	07.13	縄文時代土壙群を確認〈継続して発掘〉	〃

＜1988年度～1995年度＞埋蔵文化財調査研究センター

番号	事業名	調査開始日	概要	文献
21	工．校舎	1988.04.11	溝状遺構・水田址検出〈1988年度発掘〉	年報6
22	農・薬．動物実験棟及び遺伝子実験施設	05.23	溝状遺構検出〈1991年度発掘〉	〃
23	事．国際交流会館	06.06	近世・中世遺物出土〈1988年度工事立会〉	〃
24	大自．合併処理槽	1989.08.23	中世～明治の水田の畦畔・溝〈1989年度工事立会〉	年報7
25	学．合宿所	09.18	弥生早期～弥生前期の畦畔〈1989年度工事立会〉	〃
26	教育．エレベーター	11.27	縄文時代後期の落込み〈継続して発掘〉	〃
27	図書館	1990.02.20	古代水田，弥生～古代の溝〈1994年度発掘〉	〃
28	学．合宿所ポンプ槽	05.07	弥生時代前期畦畔	年報8
29	資源生物科学研究所	08.22	中世後半以降土器片	〃
30	ｱｲｿﾄｰﾌﾟ 総合ｾﾝﾀｰ	10.15	中世ピット・土器など〈1990･91年度発掘〉	〃
31	福利厚生施設	10.29	弥生～古墳時代の溝〈1995年度発掘〉	〃
32	農．汎用耕地実験施設	1993.12.06	中～近世耕土	年報11
33	農．動物実験施設	1995.03.13	地形の確認	年報12
34	国際交流会館	09.04	遺跡は希薄	年報13
35	環境理工学部	11.21	土坑他〈1996年度発掘調査〉	〃
36	ﾎﾞｸｼﾝｸﾞ部ﾎﾞｯｸｽ	1996.03.18	弥生～古墳と古代の溝	〃

刊行物一覧

	〈1983 ～ 1987 年度 〉	〈1988 ～ 1995 年度〉
発掘調査報告書	3 冊	7 冊
構内遺跡調査研究年報	4 冊	8 冊
センター報	0	15 冊

発掘調査報告書

＜1983年度～1987年度＞

番号	名　　称	発行年月日
1	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡 （AW14区）の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集	1985年５月７日
2	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第２冊	1986年３月31日
3	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊	1988年３月31日

＜1988年度～1995年度＞

番号	名　　称	発行年月日
4	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第４冊	1990年３月31日
5	津島岡大遺跡３ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊	1992年３月31日
6	鹿田遺跡３ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第６冊	1993年３月31日
7	津島岡大遺跡４ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第７冊	1994年３月31日
8	津島岡大遺跡５ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第８冊	1995年３月31日
9	津島岡大遺跡６ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第９冊	1995年12月30日
10	津島岡大遺跡７ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第10冊	1996年２月29日

構内遺跡調査研究年報

＜1983年度～1987年度＞

番号	名　　称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度	1985年２月28日
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度	1985年３月30日
3	岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度	1987年３月31日
4	岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度	1987年10月31日

＜1988年度～1995年度＞

番号	名　　称	発行年月日
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度	1988年10月31日
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1988年度	1989年10月14日
7	岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度	1990年11月20日
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	1991年12月10日
9	岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度	1992年12月21日
10	岡山大学構内遺跡調査研究年報10　1992年度	1993年12月20日
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報11　1993年度	1995年２月28日
12	岡山大学構内遺跡調査研究年報12　1994年度	1995年12月28日

センター報　＜1988年度～1995年度＞

番号	名　　称	発行年月
1	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第１号	1988年10月
2	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号	1989年８月
3	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第３号	1990年２月
4	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号	1990年７月
5	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号	1991年３月
6	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月
7	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1992年３月
8	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号	1992年８月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号	1993年３月
10	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第10号	1993年11月
11	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号	1994年３月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号	1994年10月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号	1995年３月
14	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第14号	1995年10月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号	1996年３月

保管遺物一覧

保管遺物の量（1983～1995年度）：2203箱　（1箱：約30kg）

内訳　土器　　：　1153.5 箱
　　石器他　：　54.5 箱　石器・金属器・ガラス・土製品など
　　木器類　：　289　箱　※　保存処理したアンペラを含む，流木類も
　　サンプル：　706　箱　種子・骨・貝・土壌・焼土・炭など
　　※　現場から切りとり復元した炉を含む

＜1983年度～1987年度＞ 埋蔵文化財調査室　1101箱

調査名称	総数	土器	石器他	木器	ｻﾝﾌﾟﾙ	主要時期・特殊遺物
津島岡大第1次調査(NP-1)	5	0.5	0.5	4		弥生中期～古代
鹿田第1次調査（外来診療棟）	606	492	16	60	28 +10	弥生中期～古代・中世 短甲状・櫂状木器等・ガラス
鹿田第2次調査（NMR-CT室）	122	95	3	20	4	弥生後期～中世，田舟・木簡等
津島岡大第2次調査 （農．合併処理槽・排水管）	16	12	1		3	縄文晩期～弥生前期
鹿田第3次調査（医短校舎）	131	36		90	5	古代～中世
津島岡大第3次調査 （男子学生寮）	78	47	11	10	10	縄文後・晩期～弥生，古代 石製指輪，蛇頭状土器片
津島岡大第4次調査 （屋内運動場）	1	1				縄文晩期～弥生前期
鹿田第4次調査（医短配管）	3	2			1	古代，鹿角製品
鹿田第5次調査（管理棟）	128	88	1	20	19	弥生後期～古代・中世
その他	11	11				
合　計	1101	784.5	32.5	204	80	

＜1988年度～1995年度＞ 埋蔵文化財調査研究センター1102箱

調査名称	総数	土器	石器他	木器	ｻﾝﾌﾟﾙ	主要時期・特殊遺物
津島岡大第5次調査 （大学院自然科学研究科棟）	110	68	5	5	32	縄文後期～弥生，古代，中世 耳栓・木製櫛，堅果類
津島岡大第6次調査 （工．生物応用工学科棟）	80	35	3	22	20	縄文後期～弥生，古代，中世 人形木器，アンペラ，堅果類
津島岡大第7次調査 （工．情報工学科棟）	41	10	1	10	20	縄文後期～古代・中世
鹿田6次調査(ｱｲｿﾄｰﾌﾟ総合ｾﾝﾀｰ)	62	61	1			中世，青銅製椀
津島岡大第8次調査 （農薬．遺伝子実験施設）	13	11	1		1	縄文後期～古代・中世
津島岡大第9次調査 （工．生体機能応用工学科）	258	35		3	220	縄文後期～古代・中世 堅果類，
津島岡大第10次調査 （保健管理センター）	65	40		5	20	弥生前期～近世
津島岡大第11次調査 （総合情報処理センター）	5	3			2	縄文後期・弥生
津島岡大第12次調査 （図書館）	71	40	1	20	10	縄文後期・弥生～近世 木製盾・農具
津島岡大第13次調査 （福利厚生施設　北）	17	17				縄文後期・古墳前期・中世
津島岡大第14次調査 （福利厚生施設　南）	16	15			1	弥生～古墳
津島岡大第15次調査 （ＳＶＢＬ）	355	25	10	20	300	縄文後期・晩期・弥生～中世 アンペラ
その他	9	9				
合　計	1102	369	22	85	626	

施設・スタッフの推移

＜建物面積の推移＞　数値は床面積

年度　| 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 |

鹿田基礎棟　55㎡ ——————————
旧精神科棟　150㎡ ——
管理棟　292.3㎡ ————
旧管理棟　25㎡ ——————————

津島　管理棟　105.3㎡ ——————————
収蔵施設（東）　162㎡ ——————————
収蔵施設（西）　171㎡ ——————————
保存処理施設　39㎡ ——————————

＜建物の現状＞

津島地区：敷地面積　…1380㎡
総床面積　… 477㎡
総　建坪　… 310.5㎡

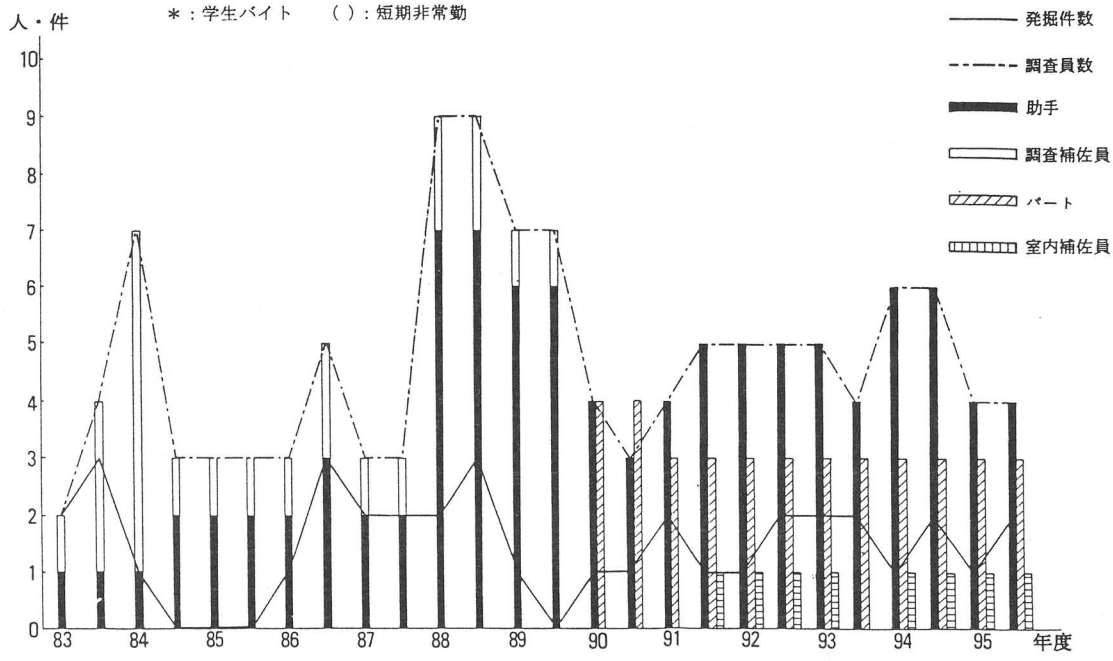
内訳　管理施設　床面積…105㎡,　建坪…105㎡
収蔵施設　床面積…333㎡,　建坪…166.5㎡
保存処理　床面積… 39㎡,　建坪… 39㎡
総床面積…477㎡,　建坪…310.5㎡

鹿田地区：借用床面積…25㎡

＜調査とスタッフの関係：年度ごとの推移＞

年度	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
発掘件数	3	1	0	3	4	3	2	2	2	2	3	2	3
調査面積	2905	2188	0	3940	2922	2937	600	780	1480	1050	2512	1472	2332
試掘件数	8	2	4	2	4	3	4	4	0	0	1	1	3
調査員数	2	7	3	3	3	9	7	4	4	5	5	6	4
助手	1	1	2	2	2	7	6	4	4	5	5	6	4
補佐	1	6	1	1	1	2	1						
室内補佐	0									1	1	1	1
室内補助	0	*5	*6	*7	(5)	(5)		4	3	3	3	3	3

＊：学生バイト　（）：短期非常勤



あとがき

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは、1997年11月で設置10年を迎えます.そこで今年に入ってからいくつかの記念事業を計画してきました。本書の出版も、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの設置10周年を記念して作成したものです。センターの10年間の歴史と、岡山大学キャンパス遺跡における縄文時代から現代までの概要をまとめ、さらに、遺跡・遺物の研究から復元される古代の生活等について、16の興味深いトピックスを取り上げました。これらのなかには、全国的にもめずらしい詳細な遺構や遺物がたくさん含まれています。また、センターの現状・将来構想・業務等に関する資料を掲載しています。以上のような本書に記された内容は、遺跡の保護を目的として1987年に設立され、数多くの調査を行ってきた、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの調査・研究等の成果の経過報告であります。

本書の刊行のほか、1997年11月8日には『今、よみがえる古代』と題して、記念講演会と、岡山大学周辺の遺跡見学会を行います。岡山大学の構内と、さらに関連する周辺の遺跡の検討から古代を今によみがえらせるのが目的です。

以上の記念事業をつうじて、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターがこれまでおこなってきた成果について、少しでも広く理解していただければと思います。

本書の刊行にあたり、小坂二度見岡山大学長をはじめ、センター設立以来の関係諸氏・諸機関にご協力いただきました。厚くお礼を申し上げます。

Summary

The Archaeological Research Centre of Okayama University was established in 1987 for the purpose of the excavation and preservation of archaeological sites on university grounds. This book is published to mark the 10th anniversary of the Centre. Over the past decade, the Centre has excavated 24 sites and published 12 volumes of site reports.

Okayama University is a national university comprising 11 faculties and numerous research departments and centres. There are two main campuses within Okayama City - Tsushima and Shikata. The Tsushima Campus possesses remains from a village of the Late Jomon (2000 BC) and rice paddy fields dating from the Yayoi through to the Meiji periods. The Shikata Campus has settlement remains dating from the Yayoi and the Ancient and Medieval eras.

Some of the major results of the Centre's work include the excavation of Jomon storage pits on the Tsushima Campus which provided concrete details of food processing techniques and of vegetation during the Jomon period. The possibilty of agriculture was suggested by the analysis of seeds from these pits and from the presence of rice phytoliths in sherds of Jomon pottery excavated from the site. It has also been possible to study the development of rice paddy fields from the irregular fields of the Yayoi period which closely followed the local topography through to the well-demarcated fields of Antiquity. Sites from the university have further produced important materials for understanding the pottery chronology of the Okayama region in the Jomon, Yayoi and Ancient periods.

This book presents the history of the Archaeological Research Centre and the sites found on the university campus. Sixteen fascinating aspects of life in prehistoric and ancient times are reconstructed using materials from the campus sites. The book concludes with a discussion of the future directions of the Centre.

今、よみがえる古代

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年

1997年11月8日

編集・発行　岡山大学埋蔵文化調査研究センター
〒700　岡山市津島中3-1-1
印　　刷　西日本法規出版株式会社